

第2次南房総市総合計画後期基本計画 市民ワークショップ報告書

令和4年4月

目 次

第1章 市民ワークショップ概要	1
(1) 目的	2
(2) 実施方法	2
(3) プログラム	3
(4) 協議内容（イメージ）	3
第2章 各班の発表まとめ	5
しごと班	6
子育て班	12
移住・定住班	17
暮らし班	22
第3章 資料編	27
(1)第1回市民ワークショップ意見概要	28
(2)第2回市民ワークショップ意見概要	41
(3)第3回市民ワークショップ意見概要	53
(4)第4回市民ワークショップ意見概要	78

第1章 市民ワークショップ概要

(1) 目的

第2次南房総市総合計画後期基本計画策定過程において、多くの市民・職員の参画を得て、今後のまちづくりについて意見交換を行うことで、主要プロジェクト及び個別施策の立案等の参考にすることを目的に実施しました。

また、変革を促すためのワークショップとすることで、市民参画を契機として、まちづくりを自分事として捉える市民を増やし、策定後も実践活動を広げていくきっかけづくりを行う場としました。

(2) 実施方法

本ワークショップでは、南房総市に在住・在勤の市民の皆さまからご意見を頂戴するため、地域で活動・活躍している人を中心に20～25人程度の参加者を募りました。具体的には、別途実施されているシティプロモーション・ワークショップ参加者や市が選考した地域で活躍している人に、市の中堅（若手）職員を加えるものとししました。

【参加者の選考】

- ① シティプロモーション・ワークショップ参加者（5名程度）
- ② その他市選出/公募の参加者（16名程度）
- ③ 総合計画策定職員ワーキングチーム（4名程度）

ワーキングチームは、中堅（若手）クラスの職員で編成し、市民ワークショップへの参加を通じて、庁内にて「重点プロジェクト」を検討しました。

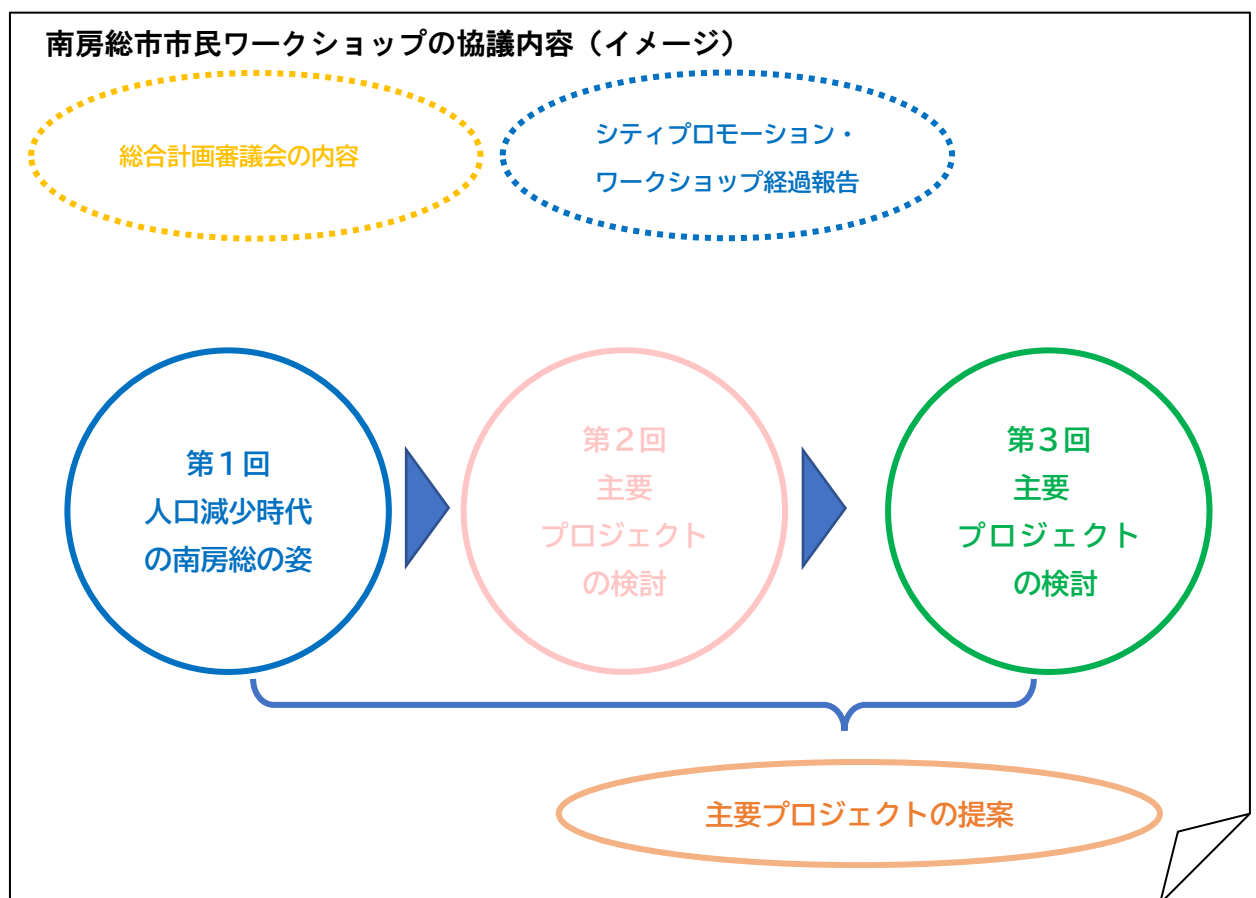
【開催日程等】

- 第1回：令和3年11月23日（火） 午前10時から正午まで
南房総市役所 別館1 大会議室
- 第2回：令和3年12月11日（土） 午前10時から正午まで
南房総市役所 別館1 大会議室
- 第3回：令和4年 1月15日（土） 午前10時から正午まで
丸山公民館
- 第4回：令和4年 3月26日（土） 午前10時から正午まで
南房総市役所 別館1 大会議室

(3) プログラム

回	日時	内容
第1回	令和3年 11月23日(火) 午前10時～正午	■オリエンテーション 情報共有(数字で見る南房総市、シティプロモーション・ワークショップの経過報告)、フリーディスカッション
第2回	12月11日(土) 午前10時～正午	■グループ討議 主要プロジェクト及び個別施策の検討(テーマ別)
第3回	令和4年 1月15日(土) 午前10時～正午	■グループ討議 主要プロジェクト及び個別施策の検討(テーマ別)
第4回	3月26日(土) 午前10時～正午	■まとめ 発表準備、成果発表

(4) 協議内容(イメージ)



第2章 各班の発表まとめ グループ

しごと班 p. 6～p. 11

子育て班 p. 12～p. 16

移住・定住班 p. 17～p. 21

暮らし班 p. 22～p. 26

しごと班

班員

佐久間、川名（三）、岡本、川名（真）、藤井、落合、鈴木

（敬称略、名簿順）



しごと班の提案

しごとでつながる南房総プロジェクト

1. 私たちの想い

【稼げる仕事づくりが必要だ！】

- ・ 稼げる仕事はあるのか？稼げる仕事づくり、市内で働くメリットが必要ではないか。
- ・ 跡を継ぐ人がいない。人財不足。他地域から働きに来たくなる魅力づくりが重要だ。
- ・ 誰にとっての仕事？地元の若者？移住者？他地域の人？
- ・ 既存産業（特に農林業）や、介護に従事する人財が不足している。
- ・ 農業や介護の求人はあるが、十分に稼げない。何か良い方法はあるか？
- ・ 就きたい仕事在地元になく、だから出ていくのではなく、仕事があれば自分で創業すればよい。創業の環境づくりとともに、子どもの頃からの意識づけが大切だ。

【（そこそこ）稼げる働き方づくりが大切だ！】

- ・ 南房総市で暮らそうという人には、そこそこ稼げればよい、という人が多くないか？
- ・ 趣味が仕事になる、そんな流れを促せれば。
- ・ 短時間・短期間の仕事を組み合わせ、（そこそこ）稼げる働き方が出来ないか？
- ・ リモートワーク普及の流れも追い風になるのでは。
- ・ 組み合わせると言っても、ステレオタイプではない。きめ細かな対応・マッチングが要。
- ・ 組み合わせるにあたっては、地元の仕事が見えない・ニーズが分からないという問題。

【南房総らしい暮らしの実現、地域課題の解決につながる仕事づくりが良い！】

- ・ 人口減少と少子高齢化が進んでいる。地域課題の解決に取り組む仕事づくりが必要である。
- ・ 農業とは？職業としての「農」、農的生活を楽しむ「農」か？
- ・ かつての南房総市は、農業を軸として暮らし、コミュニティが成り立っていた。
- ・ 子どもの頃からの意識づけが大切。子どもたちが、地域の産業や仕事について、学ぶ機会があれば良い。
- ・ その際、単なるイベントとしての体験ではなく、仕事をするカッコいい大人を、しっかり見て、感じて、いいなと思ってもらえるように。

2. 解決したい課題と提案の目的

【解決したい課題】

①後継者・創業者といった「人財」の育成

- ・主に農業であるが、家業を継ぐ人がいない。後継者不足である。求人はあっても、介護に従事する人財も不足している。
- ・仕事があれば自分で創業すればよい。起業・創業、事業継承を志す人財を育てる必要がある。仕事をつくろう。

②労働力という意味での「人材」のマッチング

- ・少子高齢化と人口減少の中、人材は不足している。若者・女性などが仕事に就きやすい環境づくりが大切である。仕事の見える化・見せる化が重要である。
- ・繋がる仕事を上手く組み合わせることができないか。一つひとつの仕事は稼げなくとも、組み合わせるとまとまった収入を得られるようにできないか。

③南房総らしい仕事×暮らしの実現

- ・そこそこ稼げればよい、趣味が仕事になる流れを促せばよい。リモートワーク普及も追い風である。
- ・地元の仕事への興味・関心を育てることが大切である。子どもの体験機会・学習機会をしっかり設けていく必要がある。

【目的】

- ・南房総市における仕事の「見える化」と「見せる化」を進めるとともに、人と仕事の「マッチング」を図ることにより、仕事を通じて、人と人、人と地域が繋がるまちづくりを実現する。
- ・このような取組を通じて、南房総市で働いてみたい・働いてゆけるという子どもと大人を増やし、人口減少の抑制を実現する。
- ・また、起業家など産業人財や、産業の担い手としての労働力の確保に繋げ、南房総市における産業振興を実現する。

3. 具体的な事業の提案

【事業の内容】

STEP1 しごとの「みえる化」

①市民・市外在住者が対象：推進組織の設立と仕事の情報収集

- ・ 後述するように、多彩なステークホルダー（協働実施者）による「しごとでつながる南房総プロジェクト」推進組織を設立する。
- ・ この組織では、南房総市役所を含むステークホルダーから仕事に関する情報を収集し、これを分かりやすく発信して、仕事の「みえる化」を図る。

STEP2 しごとの「みせる化」

②市内の子どもが対象：体験と学びの機会拡充

- ・ 就きたい仕事がないからと言うが、大人たちは、子どもたちに「南房総での仕事の良さ」を見せているか？伝えているか？「稲刈り体験」などの体験に留まらない、「南房総での仕事」を知り、学び、関心を持って貰う取組を、学校教育の中などで拡充する。
- ・ 同様に、仕事がないならつくる、といった起業家精神を育む取組を実施する。→【他のテーマとの協働（横串）】「子育て」に関連。

③市民・市外在住者が対象：南房総らしい仕事と暮らしの機会提供

- ・ 例えば有害鳥獣対策×民宿業の活性化として、ハンターたちに民宿に泊ってもらい、南房総を味わってもらう等の既存の取組を広く周知、拡大する。仕事が地域課題の解決に資するものであればなお良い。
- ・ 南房総らしい、農林漁業×南房総での暮らし×趣味×複業を促進する。（そこそこ）稼げる環境をつくる。→【他のテーマとの協働（横串）】「暮らし」に関連。

④市民・市外在住者、事業者が対象：起業・創業、事業継承、事業改革の専門的なサポート

- ・ 商工会議所や地域金融機関などの専門的な知識を有するスタッフにより、起業・創業、事業継承、事業改革（生産性向上・生産性アップなど）をサポートする。
- ・ 起業×事業継承×複業促進が移住・定住に繋がる。すべてが繋がるようにすれば良い。→【他のテーマとの協働（横串）】「移住・定住」に関連。

STEP3 人としごとの「マッチング」

⑤市民・市外在住者、事業者が対象：「複業」を促す仕組みづくり

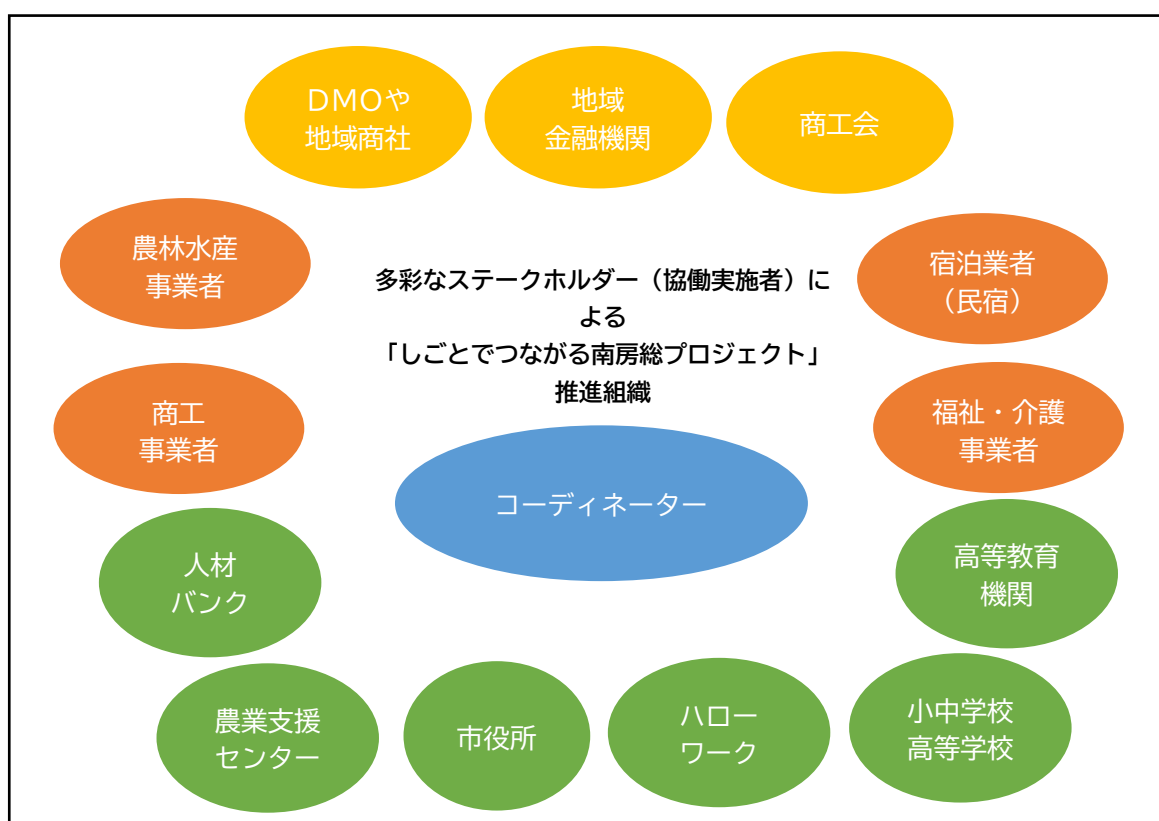
- ・ 複業を促進するインターネット上の仕組みをつくる。複業バンク・複業クラウド等。農林漁業や福祉など、産業ごとに人手不足を埋める視点でマッチングを図る。
- ・ インターネット上の仕組みのみならず、実体としての場をつくる。しごとカフェ等。事業者においては、アウトソーシングできる「小さな仕事づくり」も大切である。

⑥市民・市外在住者、事業者が対象：人としごとの「マッチング」を促す仕組みづくり

- ・ インターネット上の仕組みや、しごとカフェ（ブース）などにおいて、仕事の「見える化」「見せる化」のみならず、人としごとの「マッチング」を図る。
- ・ 上記は、先に述べた推進組織が、ハローワークや市内事業者との連携のもとに行う。なお、見える化された仕事のマッチングは、後述する推進組織の『コーディネーター』を中心としたステークホルダーがサポートする。
- ・ このコーディネーターの設置と機能発揮が、極めて重要である。

【事業のステークホルダー（協働実施者）】

- ・ 公共公益的組織：ハローワーク、DMO（観光地域づくり法人）、地域商社、商工会、人材バンク、市役所、小中学校・高等学校、農業支援センター
- ・ 事業者・団体：農林水産業事業者（農林漁家）、福祉・介護事業者、宿泊業者（民宿）、地域金融機関、その他市内の事業者、おせっ会（館山市）等の団体
- ・ コミュニティ：地域のプラットフォーム→【他のテーマとの協働（横串）】「暮らし」関連。



【スケジュール】

- ・ STEP1 しごとの「みえる化」（推進組織の設立と仕事の情報収集）、STEP2 しごとの「みせる化」、STEP3 人としごとの「マッチング」の順に着手する。
- ・ 概ね5年後には、STEP3の「マッチング」まで実現されているイメージである。

【事業の成果（アウトカム）】

①人口減少が抑制される。

- ・“南房総で働いてみたい”“南房総で働いて（そこそこ）稼いでいける”という子どもと大人が増えれば、南房総での仕事と生活が身近になり、子どもの流出を止めるとともに、若者のU I Jターン増加に繋がる。

②産業が振興される。

- ・起業家など産業人財の育成が進むことから産業が振興し、マッチングにより労働力不足が改善される。

子育て班

班員

小川、押元、白井、川名、鈴木、加藤

(敬称略、名簿順)



子育て班の提案

市在住の子育て世帯満足度 ↑

1. 私たちの思い

【子どもが戻ってきたい地域にしよう】

- ・ 地元の魅力（資源・人）を知る教育により、子どもが地元に興味を持つようにする。
- ・ 仕事と子育ての連携強化により、子どもが地域に戻ってくるようにする。

【市全体として子育てに注力する】

- ・ 子育てを最優先として、市全体が覚悟を持って進める必要がある。
- ・ 児童手当、補助金増額など、子育て世代向けの財源を大きく予算化する（子どもの数が少ないため大きな負担にならないはず）。

【丁寧なニーズの把握が重要】

- ・ 取組を進めるには、まず、子育て世代のニーズ（経済的支援かハードかソフトか）や、子育て世代の働く女性が仕事・家庭・子育てを両立するためのニーズを把握する必要がある。
- ・ 幼少期や中高生など、子育ての各段階で特有のニーズがあるが、その時期を過ぎれば、忘れ去られてしまい、ニーズが共有されないという問題点もある。



市民が地域について話し合い、意見が反映できる場所や機会をつくることで、交流の拠点が生まれ、市民・行政・事業者を含めて市全体として子育てを支援していく

2. 解決したい課題と提案の目的

【解決したい課題】

①子育て世帯の交流が少ない

- ・ 小さな公園の古い遊具が撤去されるなど、子どもの遊び場や公園・交流する場所が少なくなっている。よって館山や富津など市外の大きな公園に車で出かける子育て世帯が多い。
- ・ 大型遊具の維持費と費用対効果を考えながら、目玉となる遊具や広場を備えた公園の整備が必要である。（例 三芳小の丸太、ターザン、千葉子どもの国キッズダム）
- ・ 小中学生のための遊び場としては、学校の校庭を開放するとよい（既に取組あり）。
- ・ 過疎化により学校当たりの児童数が少なくなっているが、ある程度の集団規模を維持した方が、子どもに良い影響（集団スポーツ、人との交流増加）があるのではないかと。

- ・子育て環境において、元からの居住者は転入者とではギャップがある。転入者は近くの祖父母からの支援を受けられなかったり、子育ての情報が入手しにくかったりするため、子育てサービスがまとまった分かりやすい地図があると良い。

②ニーズの反映がされにくい

- ・幼少期や中高生など、子育ての各段階で特有のニーズがあるが、その時期を過ぎれば、忘れ去られてしまい、ニーズが共有されないという問題点もある。

③みんなが行きたくなる公園

- ・遊びに着目したコンテンツが充実している
- ・飲食で人を引き付ける（キッチンカーが立ち寄れる公園）
- ・イベントを開催できる公園を作り、人々の交流を生み出す（事前に facebook で告知をする）

【目的】

①市民のニーズが反映された公園をつくり、運営する



②交流の拠点となる子育て重点地区の設置

- ・目玉となる大型の公園整備（ハード）と、各種イベント開催（ソフト）を組み合わせ、交流の拠点となる子育て重点地区を設置する。



③交流が生まれる

【他のテーマとの協働（横串）】

- ・「子育てしやすいまち」をキャッチフレーズとしてシティプロモーションで大胆に打ち出す。（流山市の事例参照）
- ・上記取組により、市内に在住の子育て世代の満足度が上がれば、市外からの評判もよくなり、移住者が増えるのではないかな。

3. 具体的な事業の提案

【事業の内容】 ※目的①に焦点を当てる

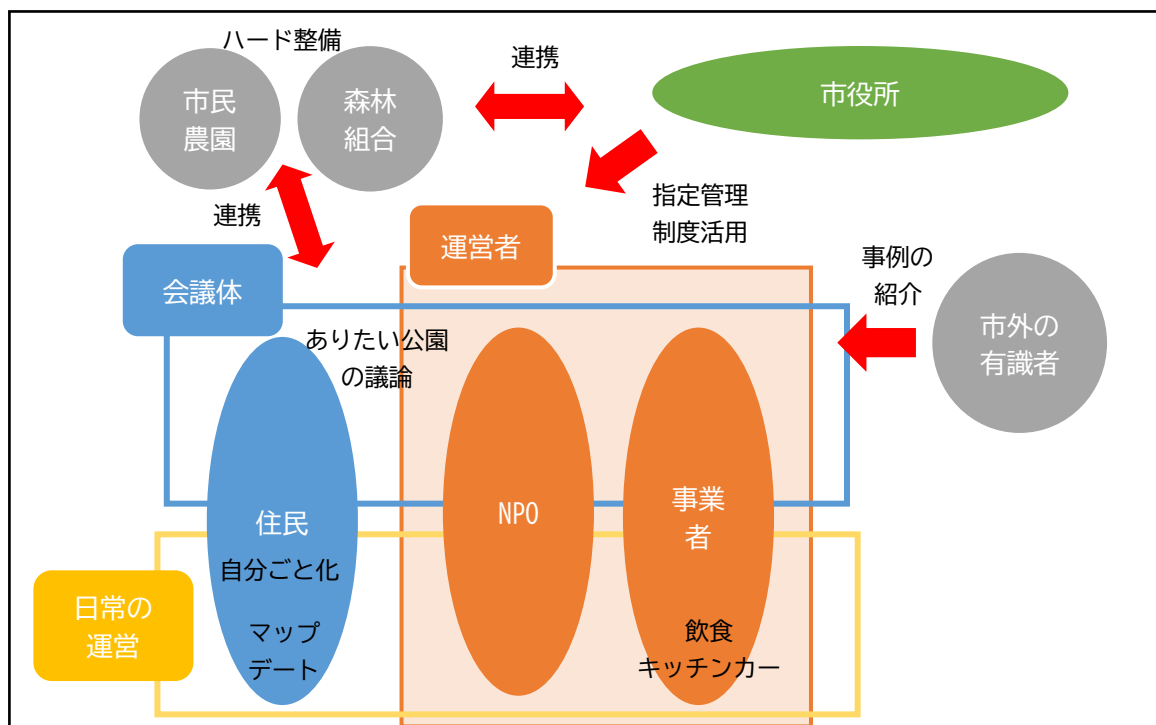
(1) 公園について議論する会をつくる

- ・公園のハード整備が進んでいる部分があるが、ソフトの部分や運営面で、市民や事業者が議論する場をつくることで、意見を反映させる。
- ・他自治体の公園の先進事例を学び、市民のニーズを取り入れた上で、南房総ならではの公園を考える。

議論の詳細

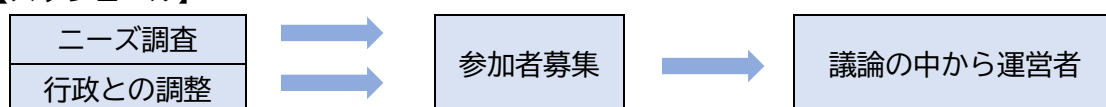
テーマ	・南房総ならではの公園を考える
議論する点	・ターゲット層は誰か（案：今子育てしている市民） ・運営者は誰か（案：行政がフットワークの軽い民間事業者に委託する） ・必要な機能は何か ・ニーズの収集方法
ニーズ	・普段気軽に遊べて、ごはんを食べられるような公園 ・子どもが遊べる広場や遊具 ・イベントでは指導員が必要⇒世代を越えた交流が生まれる
場所	・車を持っているターゲットが多いため、アクセスはあまり問題ない。 ・子どもが少なく分散しているため、各地に小規模の公園を作っても交流は生まれにくい。交流拠点となる大きな公園を市内に1つ作り、人を集める。 ・案：旧南三原小学校等の跡地で準備が進んでいる公園
課題	・遊具が老朽化すると危険であるため適切な維持管理方法と維持管理者が必要。 ・財政的に持続可能な仕組みが必要。そのためには、人が集まる規模の公園にする必要がある。
取組・イベント案	（参考：すでに行っている取り組み） 学校教育において自然体験や地域との交流を取り入れている

【ステークホルダー（関係者・協力者）】



- ・行政：ハード整備、市民農園や森林組合との連携
- ・事業者、NPO：イベント運営、飲食サービス（キッチンカー）、公園の維持管理、指定管理制度の活用
- ・市民、事業者、NPO：ありたい公園の議論（自分ごと化する市民を増やす）⇒市民が作っていく公園づくり（マップデート）
- ・市外の有識者：事例紹介

【スケジュール】



【事業の成果（アウトカム）】

遊び場ができる

↓

交流が生まれる

↓

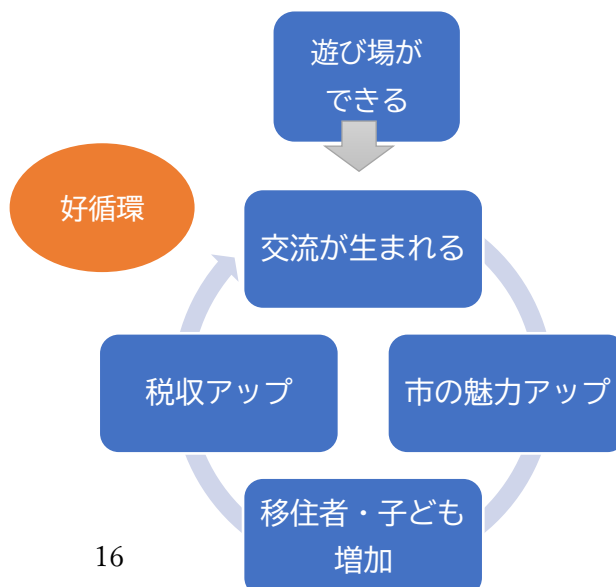
市の魅力がアップする

↓

移住者や子どもが増える

↓

税収が増える



移住・定住班

班員

荒川、福原、佐々木、澤、山木、稲葉

(敬称略、名簿順)



移住・定住班の提案

移住者トータルコーディネート大作戦！

1. 私たちの思い

【移住・定住には具体的なイメージが重要】

- ・移住者を増やすためには、漠然としたシティプロモーションだけではなく、具体的なターゲットを設定した魅力的な移住・定住プランが必要となる。
- ・移住者が実際に住むまでの流れを想定し、具体性を持たせた課題を解決しなければならない。→ターゲットを設定した上での移住・定住促進事業を提案する。

【課題は山積み：市内の受け皿、移住者が感じるハードル】

- ・現状、課題が山積している。南房総市で移住者を受け入れる「受け皿」としての課題と移住者が漠然と感じる「移住へのハードル」を下げるべきである。
- ・「受け皿」は市内にある宿泊施設や空き家などのハード面の整備だけでなく、市内在住者が持つ移住者への意識改革などのソフト面のハードルも顕在化している。

（受け入れる側の課題）

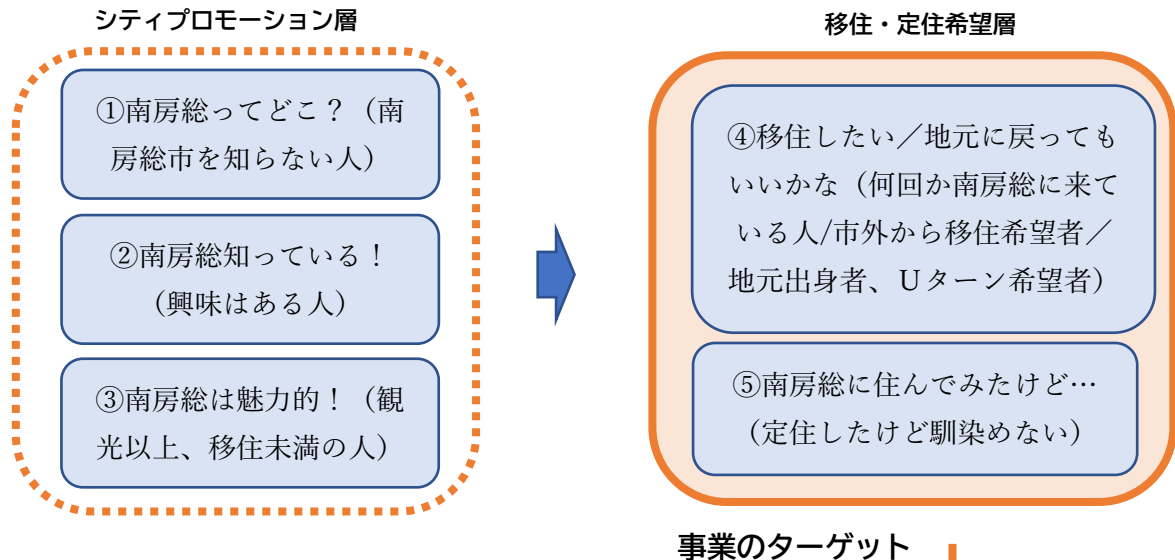
- ・空き家を持っている人が、家を貸したがない。（貸し手が不安を抱えている。）
- 空き家の貸し手同士の情報共有の場が少ない。
- ・もともと地域に住んでいる人が、移住者が市内に住むことを拒んでいる気がする。（若い人が移住してくるのを拒む気風もある。）
 - ・海のスポーツ（SAP、サーフィンなど）を通じたテーマコミュニティは盛ん。
- 移住者コミュニティと既存コミュニティの繋がりが少ない。

（移住者へのハードル）

- ・そもそも適当な物件がない。空き家はボロでは住めない。（空き家をそのまま貸し手も魅力的な移住ないしは定住に繋がらない。）
 - ・実施に南房総市に住むということはどういうことか、移住希望者が想像することは難しい。移住する資金が少ない。（お金がない。）
- 必要な情報が伝わっていない。

2. 解決したい課題と提案の目的

- ・移住希望者の段階によって「解決すべき課題」が異なるため、課題とターゲットを整理した。



具体的なターゲット像：

東京在住 30 代前半の夫婦と子ども（子育て世帯）、年収：400 万くらい、仕事は自営業で子育てのため自然環境豊かな南房総市へ移住したい。
南房総市において、新たに自分で事業を展開しようと考えている。

【解決したい課題】

- ・ライフスタイルの情報発信が観光PR寄りで、実際に住むことを想定した内容ではなく、シティプロモーションよりの情報発信となっている。
- 観光プロモーションに力を入れているが、地域活動やライフスタイルのPRが弱い。
- ・南房総市への移住希望者は多いが、賃貸物件が不足しているため市外へ流出してしまう。
- 貸し手と借り手の見える化をすることで、より魅力的な物件を借りられなどマッチングが上手くいくのではないかと。借り手は古い物件だけをみても、そこに住みたいと思わない現状がある。
- ・移住を考えている人への総合的な情報不足がある。
- 移住希望者に対する地域性の見える化が必要。

【目的】

- ・移住希望者のハードルを下げる。
- ・移住希望者が市内に住むための受け皿を整える。

3. 具体的な事業の提案

【事業の内容】

(1) 受付窓口事業

- ・南房総市への移住を希望している方々に向けた総合的な受付窓口を開設
- ・大規模情報サイトの運営（移住を希望している方々に向けた情報発信）と空き家バンクの拡充、マッチングサイトの構築（空き家と移住希望者）
- ・対象は、移住希望者だけではなく、市内で空き家を所有している所有者も含まれ、貸し手の不安解消にもつなげる。また、各地域にコーディネーターを置き、空き家所有者と移住希望者を直接繋げる。

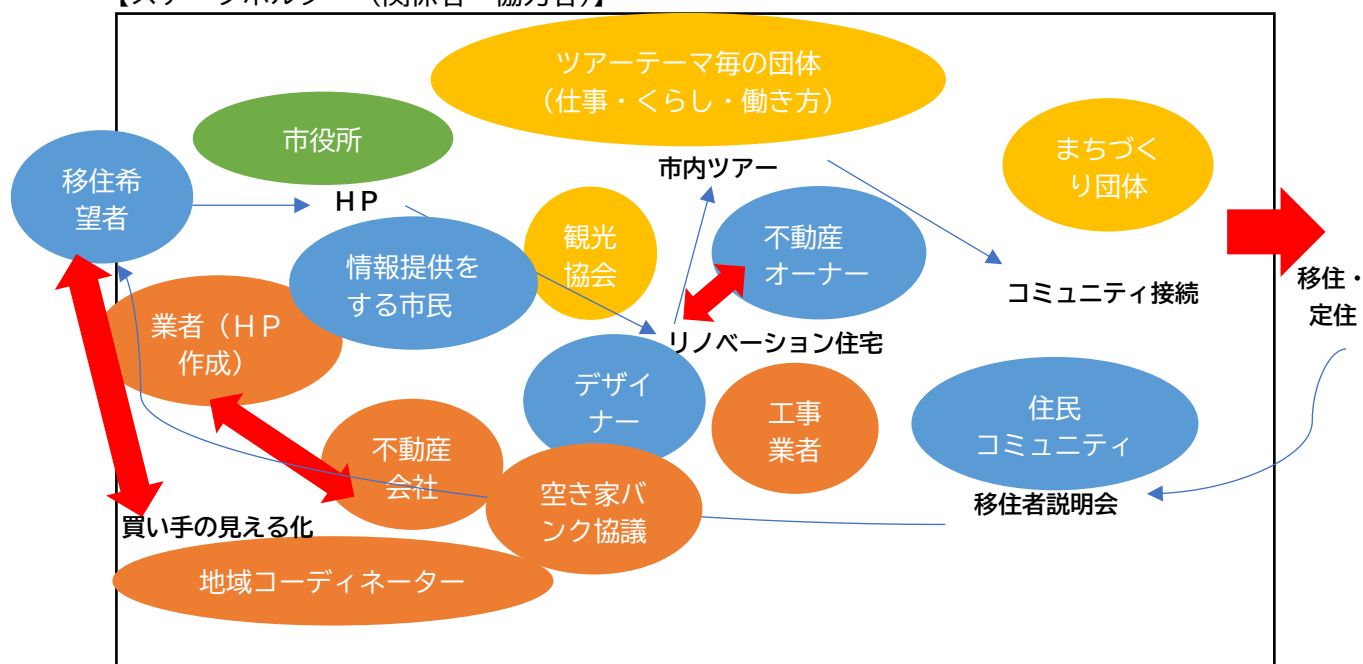
(2) 暮らし提案事業

- ・移住希望者へ具体的な暮らし方を提案する。
- ・魅力あるリノベーション（シェアハウス）
- ・共同ワークショップ（空き家のリノベーション：土壁塗り、生活体験：農業や林業体験ワークショップなど）
- ・テーマ毎のツアー＋マッチング
- ・リノベーションまちづくり事業

(3) フォローアップ事業

- ・市内の事業者や移住希望者へのフォローアップを行う。
- ・移住者が既存コミュニティに入れるよう支援。

【ステークホルダー（関係者・協力者）】



【スケジュール】 ※年間スケジュール

	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
(1) 受付窓口事業	↔	↔	↔	↔
(2) 暮らし提案事業	↔			
(3) フォローアップ事業	●	●	●	●

【事業の成果（アウトカム）】

	アウトカム
(1) 受付窓口事業	・ 地域コーディネーターが貸し手と借り手を繋ぐ ・ 情報の1本化（見える化）をする
(2) 暮らし提案事業	・ 移住者の在住者のつながりが波及、拡大している
(3) フォローアップ事業	・ 移住希望者が地域に定着する

指標名	内容・目標値（アウトプット）
空き家マッチング	10件
イベント開催	10回
リノベーション	3件
移住・定住者	10～20世帯

暮らし班

班員

芳賀、栗原、前川、八木、高木、渡辺

(敬称略、名簿順)



暮らし班の提案

安心・安全に暮らせる地域自治の仕組みづくり

1. 私たちの想い

私たち暮らし班は、人口減少が止まらない中で、このまちはどう生き残っていくべきか、「地域のあり方」を中心に議論した。

【地域の絆の維持・顔の見える地域づくりが必要】

- ・今後ますます人口減少・少子高齢化が進む中で、地域の絆が薄れ、失われていくことへの危機感を抱いている。
- ・買い物や遊びは市外でするため、この地域を担っている、ここに住んで良かった、など南房総市に住んでいる実感を得る機会が少ない。
- ・昔から住んでいる人は、ここには魅力がないと感じていることも多い。
- ・このまちに昔から住んでいる人以外は、地域に参画できていない（移住者、女性など）。
- ・地域の役員や委員など様々な役割が特定の人に偏っている。
- ・草刈りや遊びなど「暮らしの技術」を継承していくことが必要。今の親世代が体験していないため、子どもたちに伝承できていない。

【縮小社会でも生活の質（Quality of Life）を維持することが大切】

- ・縮小社会を見据えた地域づくり（スマートシュリンク）、「偉大なる縮小」が大切。
- ・地域の中で生活に必要なものが揃い、交通の足を確保できるよう、小さな拠点と交通網などハード面の整備が必要。
- ・地域での孤立を防ぐための見守り、食事や買い物などソフトの支援も必要。
- ・市全体としての一体感や1つのゴールを目指すことも必要だが、一方で、7つのまちのまとまりを重視した地域づくりも必要。

【市民自身が地域をマネジメント（経営）することが大切】

- ・2019年の台風被害で、市役所は機能しなかった。災害が大規模化、頻発化する時代にあっては、地域の実態に合わせて自主防災機能を発揮することが重要。
- ・地域でできることは地域で担い、公助に求めることは明確に分ける。
- ・地域自治の担い手は「行政区」だが、担い手や後継者不足が問題で、活動継続が困難になっている。
- ・何事も楽しく参加できる仕組みづくりが必要。楽しいことには多くの人が参加するし、長続きする。

2. 解決したい課題と提案の目的

【解決したい課題】

①「行政区」の事業継続

- ・地域自治の担い手は行政区で、市内には116の行政区があるが、リーダー的役割を担う人材が不足している。
- ・区長の交代によって、行政区で実施している事業の継続性が失われることが危ぶまれる。
- ・災害時に、市役所は機能せず、行政区の自主防災機能が果たす役割が大きいため、行政区の強化が必要である。
- ・平時から「顔の見える地域づくり」をすることで、災害時の対応が可能となるが、普段からの地域の絆を築いておく必要がある。
- ・行政区自体が民主的になるよう見直すことも重要。世帯主が区長になる通例、若者や女性の発言や決定機会がない現状を変えていく必要がある。

②「地域づくり協議会」の役割の見直し

- ・地域づくり協議会は、合併後に、地域自治のために7つのまちごとに立ち上げられたが、本来の目的を果たしていない。
- ・各地域づくり協議会の果たしている役割がまちまちで、各地域団体が自由に活動している様子。また、和田地区は様々な経緯から地域づくり協議会が解散となった。
- ・現在、6つの地域づくり協議会には、それぞれ1～2人の「地域づくり支援員」が臨時職員として配置されているが、実態としてはお手伝い役にとどまっており、地域自治のために機能していない。
- ・地域づくり支援員自身に、地域自治を担っていこうという想いがある人は少ないように見える。
- ・このため、地域づくり協議会の本来の目的に立ち返り、地域自治の担い手としての役割を果たすように仕組み自体を見直す必要がある。

【目的】

人口減少に対応した安心・安全に暮らせるまち
「帰ってきてもいいよ」と言えるまちにする

人口減少する中でも、このまちの良さや守るべきところは守り、安心して安全に暮らし続ける。その結果として、地元の人が子どもたちに「帰ってきて」ではなく、「帰ってきてもいいよ、我々は困っていないけどね」という気持ちで迎えらるようなまちにすることを目指す。

3. 具体的な事業の提案

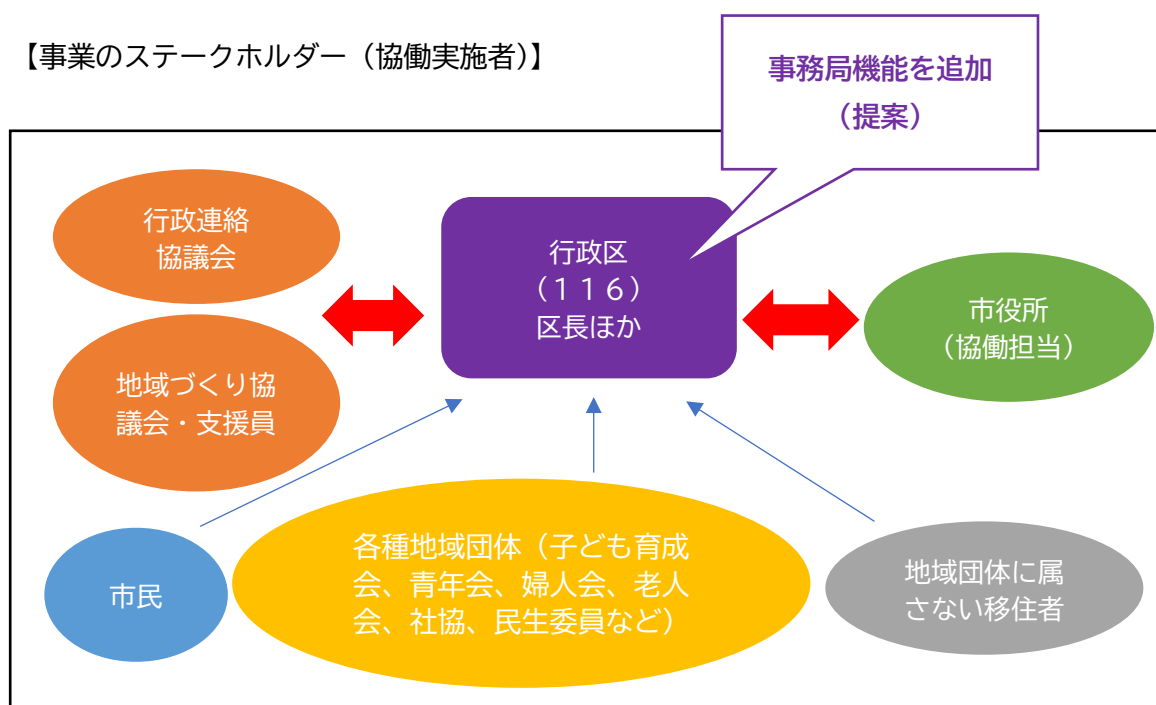
【事業の内容】

★行政区に事務局機能を担う人材を配置する

- ・区長のサポート役として、各行政区に一人ずつ配置することが最も理想である。難しい場合は、例えば旧小学校区単位など、できるだけ細かい範囲で目配りする役割を持つ人を置く。最終的には、7つのまちごとなど、地域特性に応じて、話し合いにより配置単位を決める。
- ・人材の候補としては、40代以下の若手市職員、自覚ある市役所OBのほか、年金生活の高齢者、移住者などが考えられ、地域自治の担い手の役割を有償で、仕事として任せる。⇒
【他のテーマとの協働（横串）】「しごと」「移住・定住」に関連。
- ・事務局機能の内容については、各行政区が話し合って決める。具体的には、各種の資料整理や管理、申請手続き、外部との交渉、次世代の育成などを担うことが考えられる。ICTを活用して事務の効率化、広報の充実を図る。
- ・いくつかの行政区において事務局機能を設置するモデル事業を実施する。
- ・農漁村や市街地などによって地域特性が異なるため、行政区ごとに考え、各区にふさわしい事務局機能をつくり上げていく。
- ・高齢者は「生涯現役世代」と捉え、地域の原動力として活躍を促す。
- ・一方で、普段、地域への参画が少ない、若者や子育て世代、女性、移住者が参画しやすい工夫をすることで、地域自治の担い手の裾野を広げる。

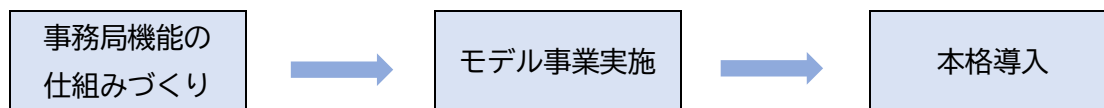
(※なお、「地域づくり協議会」の役割の見直しに関する事業については、話し合いの結果、具体的で実行可能な解決策が見い出せなかったことから、本提案には含めないこととした。)

【事業のステークホルダー（協働実施者）】



【スケジュール】

- ・期間は令和5～9年度を想定。



【事業の成果（アウトカム）】

《地域自治の強化》

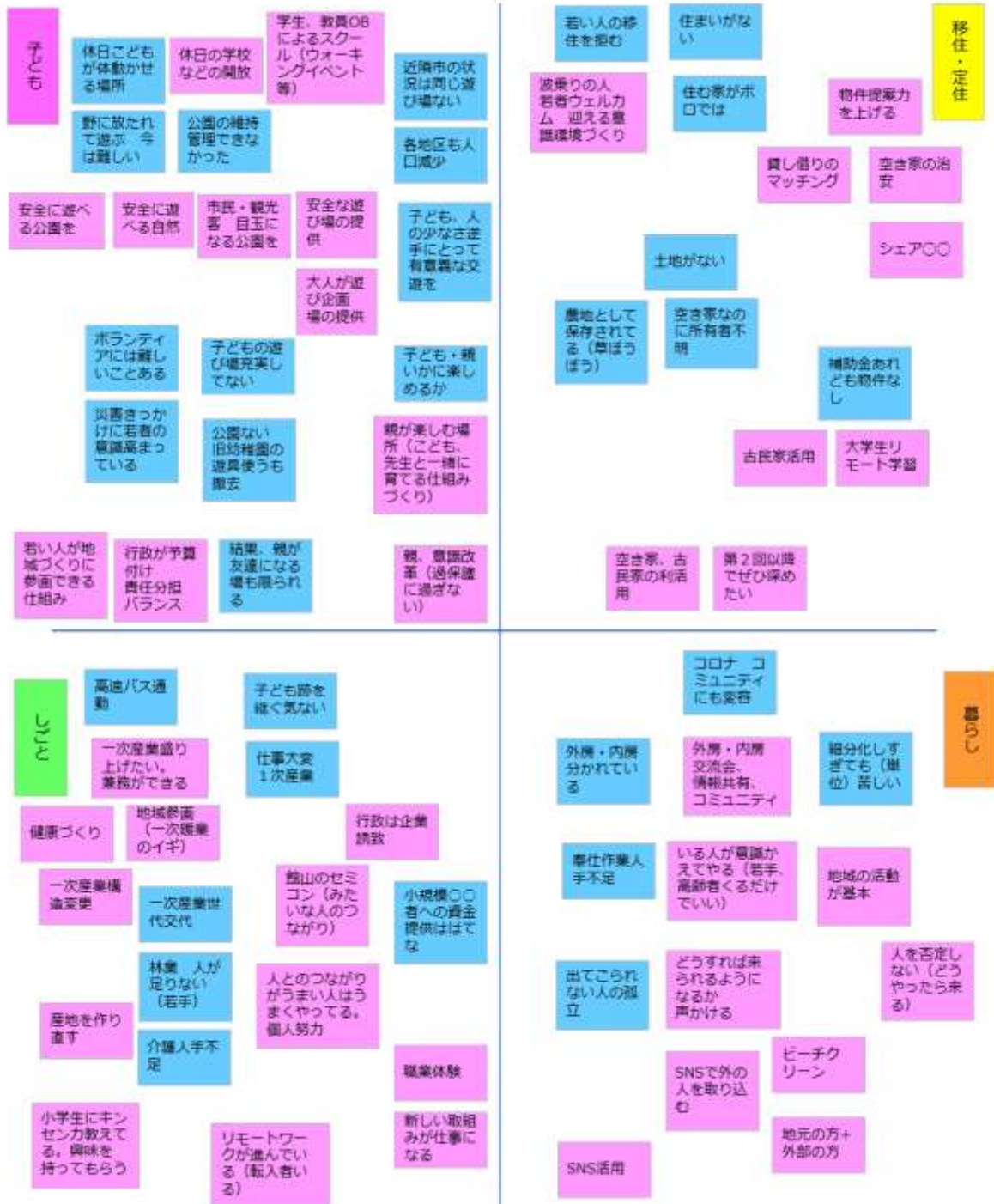
- ・行政区において住民が必要とする事業が時代に合わせ継続・発展している。（ICT 活用による各種事務の効率化、広報の充実など）
- ・地域自治を担う人材が育っている。
- ・若者、子育て世帯、高齢者、女性、移住者など多様な人が地域自治に参画している。

第3章 資料編

(1)第1回市民ワークショップ意見概要

第1回南房総市市民ワークショップ

1班



主な意見	
子育て 【現況・課題】 ・子どもと親が日常生活をいかに楽しめるかが重要。 ・子どもの遊び場、体を動かせる場が充実していない。（安全に遊べる公園が少ない。旧幼稚園遊具も撤去） ・結果、親どうしの交流の場も限られる。子どもの少なさを逆手にとって有意義な交遊を。 【重点取り組み】 ・安全に遊べる環境を整備する（目玉となる自然と公園の整備。統合後の校舎活用も。） ・学生、教員、教員OBも参画した子と親が楽しめる場づくり、地域ぐるみで子どもを育てる環境づくり。 ・ボランティアには限界もある。役割分担のもとに、行政も取り組む。	しごと 【現況・課題】 ・1次産業は大変厳しい。子どもが跡を継いでくれるのか疑問。林業等の世代交代も課題。 ・高齢化の中需要は多いが、介護人財が不足している。 ・小規模事業者に資金提供するだけの支援策では効果に疑問。 【重点取り組み】 ・地域参画のもとに、1次産業を盛り上げる。（地域の暮らしと1次産業は、元来一体だったはず。） ・子どもに関心を持ってもらう取組をする。（〇〇体験、〇〇教室など） ・行政は企業誘致に注力する。リモートワークで働く者の転入促進。
移住・定住 【現況・課題】 ・移住定住しようにも、そもそも適当な物件がない。 ・空き家はボロでは住めない。耕作されていないのに、農地には家が建てられない。 ・若い人が移住してくるのを拒む気風もいまだある。 ・ 【重点取り組み】 ・官民連携で、物件提案力を上げる。貸し借りのマッチングを行う。 ・古民家を大学生のリモート学習の場としている事例あり。空き家・古民家活用は第2回以降ぜひ深めたい。 ・一宮町を参考に、サーファーなど若者ウェルカムな迎える意識づくり。	暮らし 【現況・課題】 ・新型コロナウイルス感染症の感染拡大を契機に、コミュニティも変容している。交流が不足している。 ・地域活動の担い手が不足している。高齢等で活動に参加できず、孤立するパターンもある。 ・台風災害を契機に若者の意識が変わってきた。若者が参画しやすい環境づくりが大切。 【重点取り組み】 ・地域の交流を活性化。地元の人々が積極的に取り組むのが基本。 ・それに加え外部の人も取り込む。ビーチクリーン、環境への取組等。 ・SNSを活用し情報発信、声の掛け方の工夫、強制しない等意識改革も。

発表の概要

子育て

- ・子どもたちが安心して遊べる環境づくりが重要。統廃合後の校舎活用や、目玉となる公園整備を。

しごと

- ・1次産業の後継者や介護人財の不足解消、企業誘致が課題。
- ・他方、コロナ禍もあってリモートワーク、ワーケーションができる環境が揃って仕事がしやすい環境となってきた。この流れを活かす。

移住・定住

- ・空き家の活用は難しいが、取り組みが必須。
- ・人が住んでいない家がたくさんあるのに、移住したい人につなげられていない。

暮らし

- ・地域コミュニティ活動に皆が参画することを通じ、それぞれの暮らしを良くしていく。
- ・これから人がどんどん減っていく。地域住民の活動を発信し、外部の人も活動に取り込む。

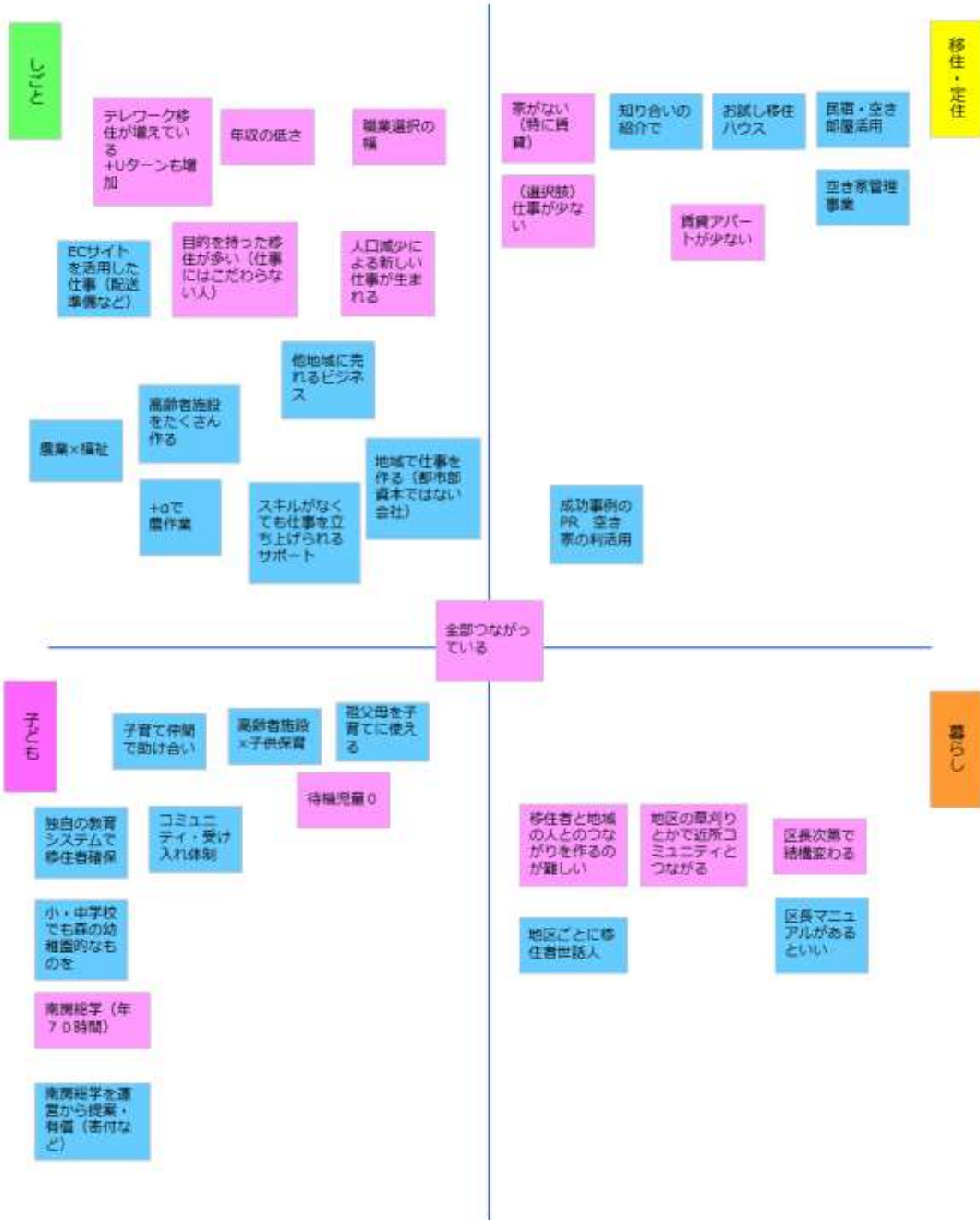
第2回に向けたコンサルタント意見

- ・「子育てに良い環境」「(子育て世代が)親子で暮らすに良い環境」とは何か、改めて問い直してみる必要がある。例えば、管理の手が追いつかなくなった自然や、遊具が老朽化しつつある公園は、安全な場所ではない。住まい、仕事、親どうしの交流など、総合的に考えることも重要。
- ・コロナ禍により、リモートワーク可能な人々が増え、これらの人々に対し、どう南房総市をPRしていけるか。住まいの環境とともに、リモートワークで働く環境づくりも大切。統合後の校舎や空き家を活用したコワーキングスペース等も考えられる。
- ・「(子育て世代が住みたいと思える)物件(及び土地)が不足しており、入手しにくい」点は、大きな問題。市役所と民間事業者の連携により、“使える・機能する”マッチングの仕組みをつくるのが大切。「空き家の有効活用」はメンバーも話していた通り、ぜひ今後深めたらよい。
- ・地元の人々の努力+外部の人々の参画で、地域活動を活性化していく方向性は明確であった。ゼロカーボン等環境への意識の高まり×南房総市の地域特性から、地域における環境保全活動への注力が、外部の人を取り込む上では有望ではないか。



第1回南房総市市民ワークショップ

2班



主な意見	
子育て 【現況・課題】 ・ 地元出身者は祖父母の協力を得て子育て。 ・ 地域の絆が強く、転入者も子育て仲間をつくって助け合う。 【重点取り組み】 ・ 子育てを助け合うためのコミュニティづくり。 ・ 独自の教育システムで移住者を確保する。小中学校でも森のようちえん的な自然教育を。 ・ 小中学校での南房総学（年 70 時間）の授業を運営から提案する。有償や寄附で継続性を持たせる。	しごと 【現況・課題】 ・ 職業選択の幅が狭い。年収が低い。 ・ テレワーク移住が増加。U ターンも増加。 ・ 目的を持った移住が多い。（仕事にこだわらない） 【重点取り組み】 ・ （人口減少の先進地として）新しい仕事、他地域に売れるビジネスをつくる。起業をサポート。 ・ 高齢者施設で農作業する。農業×福祉で仕事をつくる。 ・ EC サイトなどデジタル技術の活用。
移住・定住 【現況・課題】 ・ 家がない。特に賃貸住宅が少ない。 ・ 仕事の選択肢が少ない。 【重点取り組み】 ・ お試し移住ハウスをつくる。民宿の空き部屋も活用する。 ・ 空き家管理事業。（地域づくり協議会などに任せる） ・ 成功事例を PR して空き家の利活用を促す。	暮らし 【現況・課題】 ・ 移住者と地元の人とのつながりを作るのが難しい。 ・ 移住者は地区の草刈りなどで近所やコミュニティとつながっている。 【重点取り組み】 ・ 地区ごとに移住者の世話人を置く。 ・ 区長によって対応に差異が出ないように、（移住者受入のための）区長マニュアルをつくる。



発表の概要

子育て

- ・ 子育て世代の移住希望は多い。自然の中で子育てできることに魅力を感じている。例えば、森のようちえんは大房岬で野外保育をメインにしており、移住者にはとても魅力的。
- ・ 小中学校には、尖った自然教育がない。南房総学は先生が企画実施するが、負担があるようなので、大房岬自然の家が自然教育プログラムなどを考え取り入れてもらうとよい。

しごと

- ・ サーフィンや農業など目的を持って移住して来る人は仕事にこだわらず、職業選択の幅や年収などは気にしていない。また、テレワークが普及して、市内で就職しないが移住するという選択肢が広がった。
- ・ 人口減少の先進地である南房総ならではの仕事として、農業ができる高齢者施設、配食サービスなどが考えられるのではないかな。

移住・定住

- ・ 移住したい人は多いが家がない。4分の1くらい空き家だが貸したがる人がいない。相続の問題が大きい。
- ・ 空き家管理の仕事をつくったり、空き家管理の成功事例をPRする。

暮らし

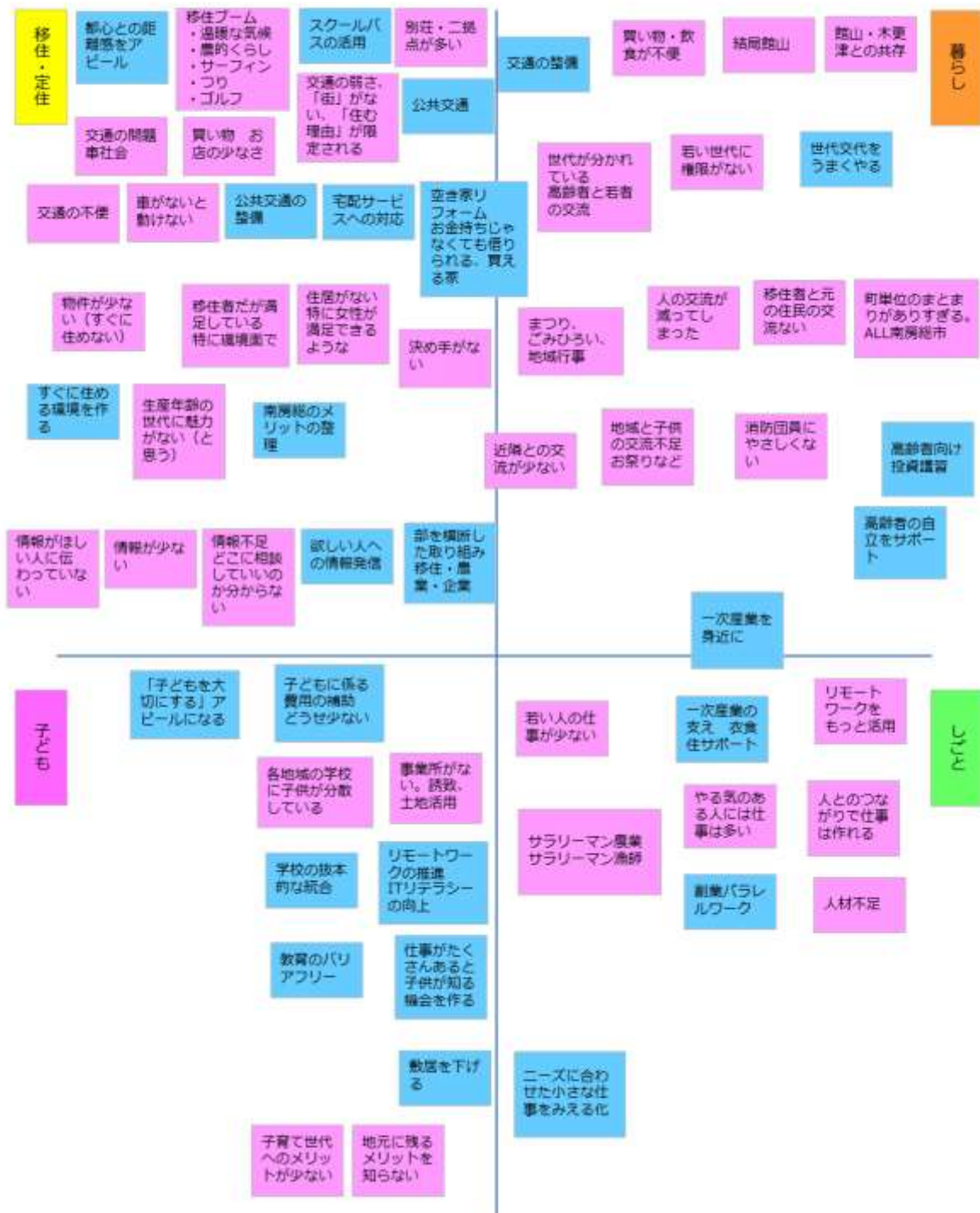
- ・ コミュニティに重点を置いた。移住者が地域に溶け込むために、区長が地域とつなぐ役割を担うとよい。移住者受け入れの際、区長向けのマニュアルがあるとよい。

第2回に向けたコンサルタント意見

- ・ 話し合いの前提として、4つのテーマ全部がつながっているという指摘があった。[しごと]がなければ[移住・定住]は進まないし、[子ども]も増えず、さらなる人口減少と高齢化により、[暮らし]を支えるコミュニティの絆は弱まっていく。4つのテーマにおける課題を複合的に解決していく視点は重要と考える。
- ・ 人口減少を逆手にとって、南房総ならではの仕事をすること。自然環境を活かした保育・教育を地域活動団体と協力して展開していくこと。空き家の活用や移住者の受け入れ体制づくりなど、各テーマの取り組みの方向性の参考となると考えられる。

第1回南房総市市民ワークショップ

3班



主な意見	
子育て 【現況・課題】 ・ 子育て世代へのメリットが少なく、また地元に残るメリットを知らない。 ・ 各地域の学校に子どもが分散している。 【重点取り組み】 ・ 市内に仕事が多くあることを子どもが知る機会を作ること、地元に残るメリットが伝わる。 ・ 学校の抜本的な統合が必要。 ・ 子どもが少ないため、子育てへの補助を大胆に増やしても、大きな負担にはならないだろう。補助を大幅に増やすことで、「子どもを大切にしている」というアピールにもなる	しごと 【現況・課題】 ・ 若い人が希望する従来型の仕事は少ないが、既存産業では人材不足も見られる。 ・ 他方、やる気があり自ら行動する人にとっては、人とのつながりなどを利用し、仕事を創れる可能性は大いにある。 ・ 一次産業の専業のみは不安定であり、「半農半X」の働き方が多い。 【重点取り組み】 ・ リモートワークをもっと活用しながら、複業・パラレルワーク（副業ではなく、複数の仕事を同時並行）を進める。 ・ ニーズとそれに合わせた仕事を可視化することで、小さな仕事を創っていく。 ・ 衣食住のサポートなどで一次産業を身近にし、始めるハードルを低くする。
移住・定住 【現況・課題】 ・ 公共交通が脆弱で、車がないと不便。 ・ すぐに住める魅力的な物件が少ない。 ・ 移住ブームにより別荘など二地域居住が多い。 ・ 欲しい人へ必要な情報が伝わっていない。 【重点取り組み】 ・ 空き家のリフォームにより、低価格ですぐに住める住居の整備。 ・ スクールバスを利用し公共交通の利便性を高める。 ・ 都心との距離感を若い世代へアピールする。	暮らし 【現況・課題】 ・ 市内では買い物や飲食が不便であり、館山や木更津と共存が必要。 ・ 様々な交流が減少している（近所との交流、世代間交流、移住者と元の住民の交流、旧市町村間の交流）。 【重点取り組み】 ・ 若い世代へ権限をあずけ、世代交代をするとともに、高齢者も自立できるようにサポートする。



発表の概要

子育て

- ・ 地元の若者が南房総市に残りたいと思わせる施策を、思い切って集中して行う。子どもへの補助金を大幅に増加させるなど。

しごと

- ・ パラレルワーク（複業）ができるようになるといい。「半農半X」のように、いろんな仕事を組み合わせてやる。単独では満足できる給料にはならない。

移住・定住

- ・ 都心から思ったより近いということを、若者に響くように情報発信していくことが必要。
- ・ 地域の公共交通が非常に少ないので、スクールバスも垣根を越えて一般の人が利用できるようにならないか。

暮らし

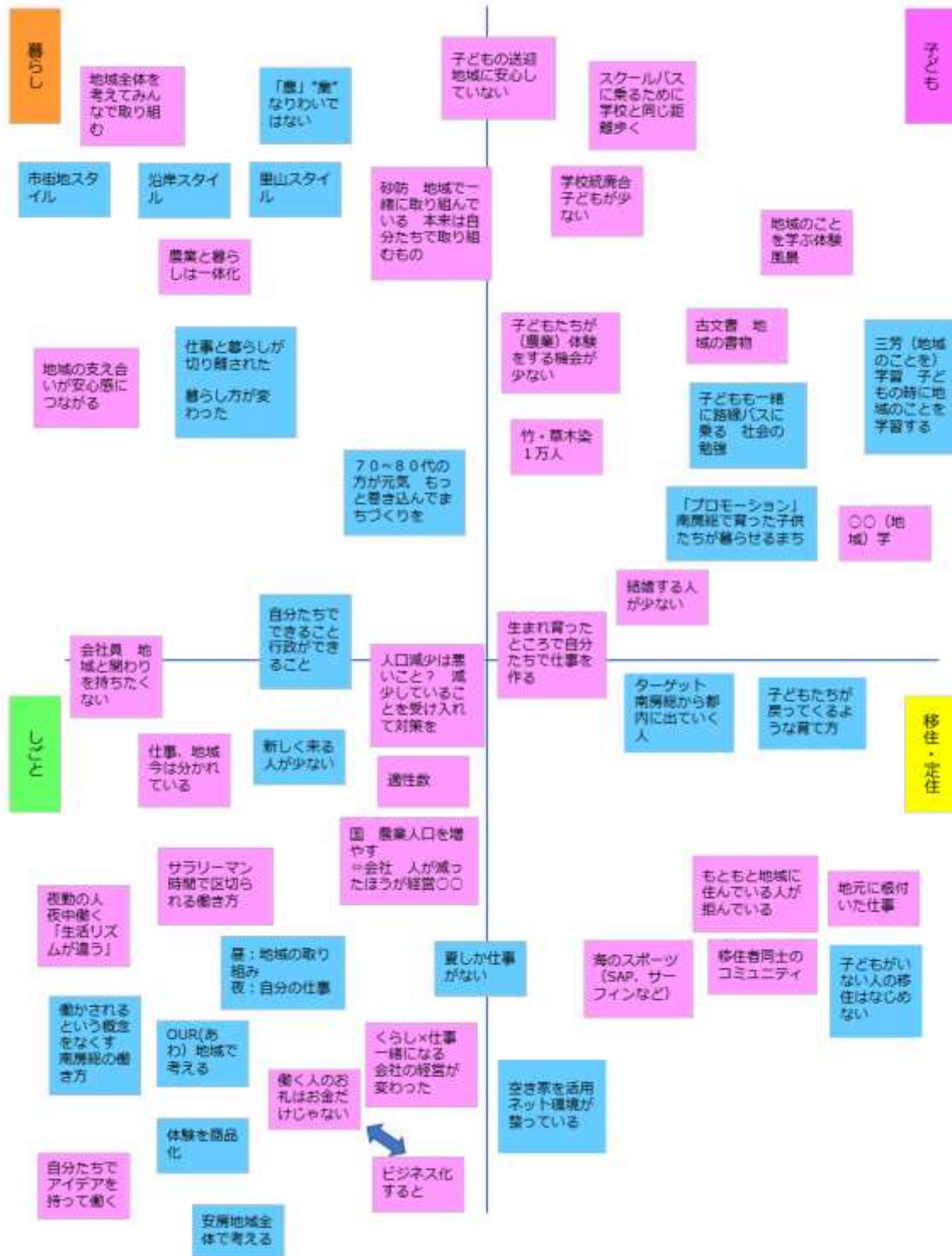
- ・ 地域コミュニティでは、世代間の情報・交流が不足している現状をクリアできるといい。
- ・ 高齢者に理解していただき、若い世代へ権限を移していきたい。消防団員への理解の促進も必要である。

第2回に向けたコンサルタント意見

- ・ 3班には、市外から移住してきた方が多く、移住者からの視点での議論が多かった。「地方には仕事がない」という固定観念があるが、よく考察すると、実際は「多くの若者が欲する従来型の仕事がない」という面が大きいのではないかと。リモートワークや複業など、自ら仕事を創り出す意思があれば、多様な仕事のニーズは多くあるため、そのような仕事を行うための環境整備と若者への情報発信が必要ではないか。
- ・ 情報発信については、必要な人に必要な情報を届けるため、シティプロモーションワークショップの意見も参考にした議論が期待される。移住・定住の際のハードルとして、手頃で住みたくなる住居が少ないことが挙げられた。また、移住した後も長く住むためには、若い世代や移住者が地域で交流しやすい環境が重要である。このように、移住前・移住時・移住後の時間軸で捉えた一体的な取り組みを議論することが必要ではないか。

第1回南房総市市民ワークショップ

4班



主な意見	
子育て 【現況・課題】 ・若い世代を中心に、地元で結婚する人が少なく、都内に出て行っていく人が多い。子どもが少ない。 ・子どもたちの（農業など）体験する機会が少ない。生まれ育った場所に愛着が持てる教育を。 【重点取り組み】 ・南房総学など地域のことを学習する機会を増やす。 ・子どもたちが南房総市内で働き、定住できるような子育て。	しごと 【現況・課題】 ・地域と関わりを持ちたくない人（市外で働く人など）が多い。 ・企業で働く人は時間で区切られた生活、夜勤の人もある。生活リズムが異なっている。 【重点取り組み】 ・「くらし」×「しごと」のアイデアで、地域の仕事を創る。 ・地元根付いた仕事を増やす。
移住・定住 【現況・課題】 ・もともと地域に住んでいる人が、市内に住むことを拒んでいる気がする。 ・海のスポーツ（SAP、サーフィンなど）を通じたテーマコミュニティは盛ん。 【重点取り組み】 ・地元で育って市外に転居した人をターゲットにしたプロモーション活動。 ・移住者同士のコミュニティと地元のコミュニティを繋ぐ。 ・ネット環境が充実している場所の空き家を積極的にPRする。	暮らし 【現況・課題】 ・自分たちできることと行政でできることを分けて考えている。地域全体をみんなで考えることが必要。 ・地域の支え合いが暮らしの安心感につながる。 【重点取り組み】 ・地域全体についてみんなで考える場づくり。各地域に合わせた計画づくり（市街地スタイル、沿岸スタイル、里山スタイル） ・地域の支え合いが見えるまちづくりの実践。



発表の概要

子育て

- ・結婚している人が少ないので子どもも少ない。地元で育っても市外に転居してしまうので、南房総市で育った子どもたちが、住み続けたいと思えるような子育て（自分たちで仕事を創る力）が大切。地域のことを学ぶ機会や体験学習などを積極的に取り入れてはどうか。

しごと

- ・昔は、地域一体となって子育てやしごとをしていたので、“農業（ナリワイ）”ではなく、暮らしの中に農があるという考え方だった。しかし、今はサラリーマンが増えて、時間で区切る働き方をしており、仕事と地域が分かれている。さらに、「自分たちでやること」「行政でやること」など、地域での取組も分かれているように感じる。「働かされる」という概念を無くし、自分たちでアイデアを出し合い働くのが、南房総市の働き方である。OUR（安房：あわ）地域全体で考えて、地域全体を盛り上げ、「市街地スタイル」「沿岸スタイル」「里山スタイル」等、地域の特色に合わせた取り組みが必要。

移住・定住

- ・地元で育った人が戻って来られないような地域では、移住者は望めない。移住者を増やす前に、地元で育った人が帰って来られるような場所を作ることで、結果的に移住する人が増えるのではないかと。観光プロモーションなどのプロモーション活動は、ターゲットの想定が必要。例えば、在宅ワーク者向けに自然環境をアピールするとともに、ネット環境の充実している場所の空き家を積極的にPRするなど具体的なイメージが湧くプロモーション活動がよい。

暮らし

- ・昔は仕事と暮らしが一体化しており、農業は生活に根付いていた。仕事と生活が分かれたことによる弊害がある。生活スタイルも変化しているので、市街地・海岸・里山などそれぞれの地域性に合った施策を検討してもよい。

第2回に向けたコンサルタント意見

- ・「地元で育った人が、市外に出ていってしまう」（移住・定住）という現状に終止符を打つ打開策が必要。4班では「子どもが住み続けたいと思えるような子育て」「生まれ育った場所で、自分たちで仕事を創る力」など力強いキーワードが出た。「子育て」×「くらし」×「しごと」⇒「定住」の促進に繋がる等、テーマを掛け合わせて具体的な取組を考える視点が必要。
- ・南房総市の生活は、“暮らし”と“ナリワイ”が一体的だったが、時代の変化とともに“生活”と“仕事”に分断して考えるようになってきている。南房総市内（沿岸部・里山地域・市街地など）の「暮らし」と「仕事」を改めて考えてみることも重要。例えば、観光客向けの自然体験×商品化、移住者向けの空き家×マッチングなど、地域の資源を活かした「暮らし方の提案」や「仕事の提案」も面白いのではないかな。
- ・市外へのプロモーションはターゲットの明確化が必要である。せっかく移住しても、季節によっては仕事（マリンスポーツ）がない、子育てで不安があるなどで定住へ繋がらない場合もある。地域のコミュニティと移住者同士のコミュニティを繋ぐ方法など、移住者のターゲットから定住した後の暮らし方までのストーリーが描けると、具体的な取組がイメージしやすい。

(2)第2回市民ワークショップ意見概要

【しごと班】

班員：川名（三）、岡本、川名（真）、藤井、落合、押元（圭）（敬称略、名簿順）

[illegible]

主な意見

解決したい課題

【稼げる仕事づくり】

- ・ 稼げる仕事はあるのか？稼げる仕事づくり、市内で働くメリットが必要。
- ・ 跡を継ぐ人がいない。人財不足。他地域から働きに来たくなる魅力がある地域づくりが重要。
- ・ 誰にとっての仕事？地元の若者？移住者？他地域の人？
- ・ 既存産業（特に農林業）や、介護に従事する人財が不足している。
- ・ 農業や介護の求人はあるが、十分に稼げない。何か良い方法はあるか？

【(そこそこ) 稼げる働き方づくり】

- ・ そもそも、南房総市で暮らそうという人には、そこそこ稼げればよい、という人が多くないか？
- ・ 趣味が仕事になる、そんな流れを促せば。
- ・ 短時間・短期間の仕事を組み合わせ、（そこそこ）稼げる働き方が出来ないか？
- ・ リモートワーク普及の流れも追い風になるのでは。
- ・ 仕事を組み合わせると言っても、ステレオタイプではない。きめ細かな対応・マッチングが要。

【地域課題の解決につながる仕事づくり】 ・ 地域課題に取り組む仕事づくりが必要である。 ・ 農業とは？職業としての「農」、農的生活を楽しむ「農」か？ 【その他の課題】 ・ 子どもたちが、地域の産業や仕事について、学ぶ機会があれば良い。
目的 【「複業」をしやすい環境をつくる！】 ・ 地元で出来る仕事をマッチングし、「複業」を推進する。 ・ 複業により、（そこそこ）稼げる環境をつくる。 ・ その際、仕事が地域課題の解決に資するものであればなお良い。
事業の内容 【起業のサポート】 ・ 起業のサポートを強化する。ECサイトの運営等。 ・ その際、ニーズに合った仕事（副業等）の可視化が必要である。 ・ 起業×事業継承×複業×移住定住。すべてが繋がるようにすれば良い。 【南房総らしい仕事と暮らしづくり】 ・ 例えば有害鳥獣対策×民宿。ハンターたちに民宿に泊ってもらい、南房総を味わってもらう。 ・ 南房総らしい、農林漁業×南房総での暮らし×趣味×複業の促進ができれば。 【「複業」を促す仕組みづくり】 ・ 複業を促進するインターネット上の仕組みをつくる。複業バンク・複業クラウド等。 ・ 産業ごとに人手不足を埋める視点での兼業（複業）を促す。 ・ インターネット上の仕組みのみならず、実体としての場をつくる。しごとカフェ等。
ステークホルダー ・ DMO、農林業事業者、民宿、福祉・介護等事業者、〇〇、〇〇、〇〇・・・（次回検討）。 ・ コーディネーターの役割がとても大切である。

発表の概要

- ・ 南房総の場合、課題はやはり人材（人手）不足である。
- ・ 農業は特にそうだと思うが、繋閑の波があり、しかもステレオタイプではない。
- ・ そこで、複業をしやすい環境づくりが、地元でできたらいいのではないか。
- ・ 事業の内容としては、より小さな仕事がある程度たくさん固めないと生活が難しかったりする
ので、ニーズに合った仕事の見える化ができるととてもいい。口コミで複業している人も多い。
- ・ 仕事の掛け合わせにも可能性がある。趣味と仕事を掛け合わせもよい。例えば、昨年行われたハ
ンターズハウスという獣害対策と民宿を掛け合わせた企画など。
- ・ 色々な仕事を掛けあわせて、南房総らしい暮らしを楽しみつつ、農業や漁業の人材（人手）不足
を補完していく仕事づくりができたらいい。
- ・ そのため、実際に仕事の情報が集まるような場所（空間。しごとカフェ等）や、ネット上の情報、
複業クラウド、複業バンクといったものの南房総版があるといい。
- ・ 観光、農業の経営者とか、民宿とか、福祉介護の事業者等がステークホルダー（関係者）となる。
それらを束ねていくコーディネーターの役割が非常に大切になってくる。

第3回に向けたコンサルタント意見

- ・ 「複業の促進」をキーワードとして、南房総市の実態に即した議論が熱心に交わされた。
- ・ 特に、短時間・短期間の仕事を掛け持ちし生活の糧を得るという、単なる「複業」に留まらず、
『南房総らしい暮らしを楽しむ複業』や『南房総の地域課題解決につながる複業』といった考
えは、都市部では考え得ない発想であり、とても魅力的である。
- ・ 第3回では、事業の内容整理から再開すると良いと思う。現状では、手段と目的、取組とその
結果が混在しているように見受けられる。
- ・ ①起業のサポート、②南房総らしい仕事と暮らしづくり、③「複業」を促す仕組みづくり（ネ
ット上の仕組みと実態としての場と2通りあり）の関係性を整理し、例えば、目玉を③として
焦点を絞る→そのためには②が必要、②の一環として、例えば商工会による①の強化も必要、
といった展開（ロジック）を組み立てていかれたら良いと思う。

(流山市の事例参照) <u>【子どもが地域に戻ってくる取組】</u> ・ 地元の魅力（資源・人）を知る教育により、子どもが地元に興味を持つようにする。 ・ 仕事と子育ての連携強化により、子どもが地域に戻ってくるようにする。 <u>【その他】</u> ・ 子育て環境において、元からの居住者は転入者とではギャップがある。転入者は近くの祖父母からの支援を受けられない。 ・ NPO や企業などと協力し、多様性を育む教育や地域づくりを進めるとよい。
<u>目的</u> <u>【交流の拠点となる子育て重点地区の設置】</u> ・ 目玉となる大型の公園整備（ハード）と、各種イベント開催（ソフト）を組み合わせ、交流の拠点となる子育て重点地区を設置する。 ・ 上記取組により、市内に在住の子育て世代の満足度が上がれば、市外からの評判もよくなり、移住者が増えるのではないかな。
<u>事業の内容</u> <u>【みんなが盛り上がるイベント】</u> ・ 子育てイベント、運動会の開催など。 （※第3回ワークショップで深掘りする）

発表の概要

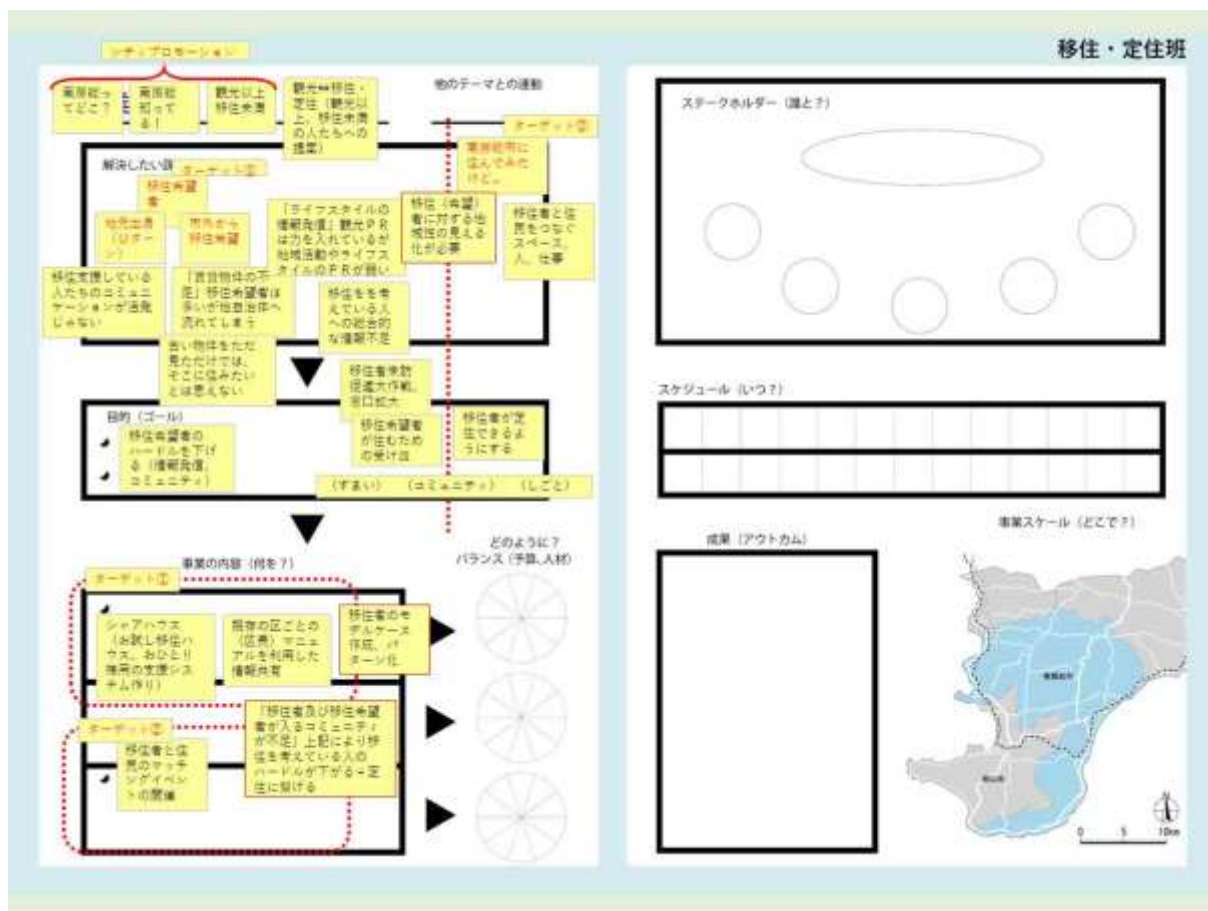
- ・ 幼少期や中高生など、子育ての各段階で特有のニーズがあるが、その時期を過ぎれば、忘れ去られてしまい、ニーズが共有されないという問題点もある。
- ・ 子どもに対する経済的支援政策を打ち出しても、子供の数は限られているので、財源はそれほどかからないのではないかと。例えば、児童手当の倍増や、通学定期代の支援などが考えられる。
- ・ 子育て世代の交流の機会となる、目玉の公園が必要だと思う。子育て重点地区というのを、例えば中心部の三芳に作り、そこで運動会やイベントを開催するなど、ハードとソフトを組み合わせ、大々的に打ち出していくのがよいのではないかと。
- ・ このように、現在市内在住の子育て世代の方が満足する施策を進めていけば、外からも見て、「いいよね、南房総市」という形なる。また、あわせて子育て重点地区の魅力を発信していけば、地元の人も満足して、外からも人を呼べると思う。
- ・ これからの議論では、子育て重点地区をどのように整備していくかについて話し合いたい。

第3回に向けたコンサルタント意見

- ・ 事業提案として今後の議論の中心になるものではないが、行政への要望として子育て世代から経済的支援のニーズが高いことが議論された。
- ・ 市域が広いわりに子どもの数が少ない南房総市においては、子どもや親たちが集まり、安全安心に遊べるとともに、交流ができる場所が必要とされている。車を持つ世帯が多いことを考えると、ある程度機能を集約した大型の場所＝子育て重点地区をつくるのがよいのではないかと。
- ・ 子育て重点地区では、ハード面の整備は行政の力が必要となってくるが、ソフト面（子育て世代のニーズを届ける、必要なイベントを開催するなど）に関しては、市民や団体、企業の力が不可欠である。
- ・ 次回以降は、子育て重点地区の目的や理想の姿を明らかにした上で、必要な機能や設備、サービス、場所の選定、各主体の役割分担などについて議論するとともに、子育て支援に関する市内外への発信方法も考えていくのがよいのではないかと。

【移住・定住班】

班員：福原、佐々木、澤、山木、稲葉（敬称略、名簿順）



主な意見

解決したい課題

・ 南房総市への移住・定住の促進に向けた課題を検討するにあたり、移住者のモデルケースを作成した。さらに、移住の段階によって「解決すべき課題」が異なるため、課題とターゲットを整理した。

「①南房総ってどこ? (南房総市を知らない人)」「②南房総知っている! (興味はある人)」「③南房総は魅力的! (観光以上、移住未満の人)」「④移住したい/地元に戻ってもいいかな (市外から移住希望者/地元出身者、Uターン希望者)」「⑤南房総に住んでみたけど… (定住したけど馴染めない)」

・ ①②③はシティPRの分野になるのではないかと。PRについては既に庁内でも検討している。
・ ④⑤は移住・定住の課題に繋がる。

⇒「④市外から移住希望者/地元出身者、Uターン希望者」「⑤移住したけど馴染めない」をターゲットとして想定する。

【市外から移住希望者】

- ・ 移住に踏み切れない人たちへの課題は総合的な情報不足が挙げられる。観光PRには力を入れているが、移住者はより具体的な暮らし方が知りたいのではないか。市内での暮らしや地域活動を積極的にPRし、南房総市のライフスタイルを発信する必要がある。
- ・ 移住希望者は多い印象だが、住まいである賃貸物件が不足している。このままでは館山等ほかの自治体に人が流れてしまう。
- ・ 賃貸物件には築年数が経過しているものも多い。紹介された物件が古くて魅力が無ければ住みたいとは思わない。

【Uターン希望者】

- ・ Uターンを希望した時、親や親せきから反対された。そもそも市内在住者が南房総市の魅力に気付いていない。移住者を受け入れる側の気持ちや、それでは移住者に申し訳ない。住民の意識改革が必要。
- ・ 南房総市の魅力に気付くためには、一旦市外に出てみることも大切ではないか。自分の体験から、外から南房総市を見ることで初めて魅力を感じることもある。

【移住したけど地域に馴染めない人】

- ・ せっかく移住しても、地元の仕事がなければ意味がない。
- ・ 移住コミュニティはあるが、それが地元のコミュニティと上手く連携できていない。

目的**【移住・定住へのハードルを下げる】**

- ・ 移住希望者に対して、積極的な情報発信、移住体験、地元の人たちとのつながりづくり、地域の情報共有
- ・ 地域の受け皿づくり（移住した人が定住しやすくなる取り組み）

事業の内容**【マッチングイベント】**

- ・ 移住者希望者と住民が繋がる機会の拡充（地元の人が住まい・仕事を紹介、農業体験の実施）

【空き家活用】

- ・ 市内の賃貸物件が見える化（市内の移住支援を行う企業・団体の支援）
- ・ 移住希望者が決まらない物件を対象にリノベーション。暮らしと住まいをセットにした魅力的な生活スタイルの提案。

【南房総魅力再発見】

- ・ 市内在住者を対象に、地域外での暮らしを体験。南房総市の魅力を再発見してもらう。
- ・ 市内外の誰もが住めるシェアハウスを作り、南房総市のスタイルを体験してもらうとともに、外の文化も積極的に取り入れる生活スタイルを提案。

【地縁コミュニティ】

- ・ 地域の高齢者（孫がいない家庭）を対象に、地域で子育てする社会を構築。血縁関係がなくても地域で一つの家族のようなコミュニティを創出する。

発表の概要

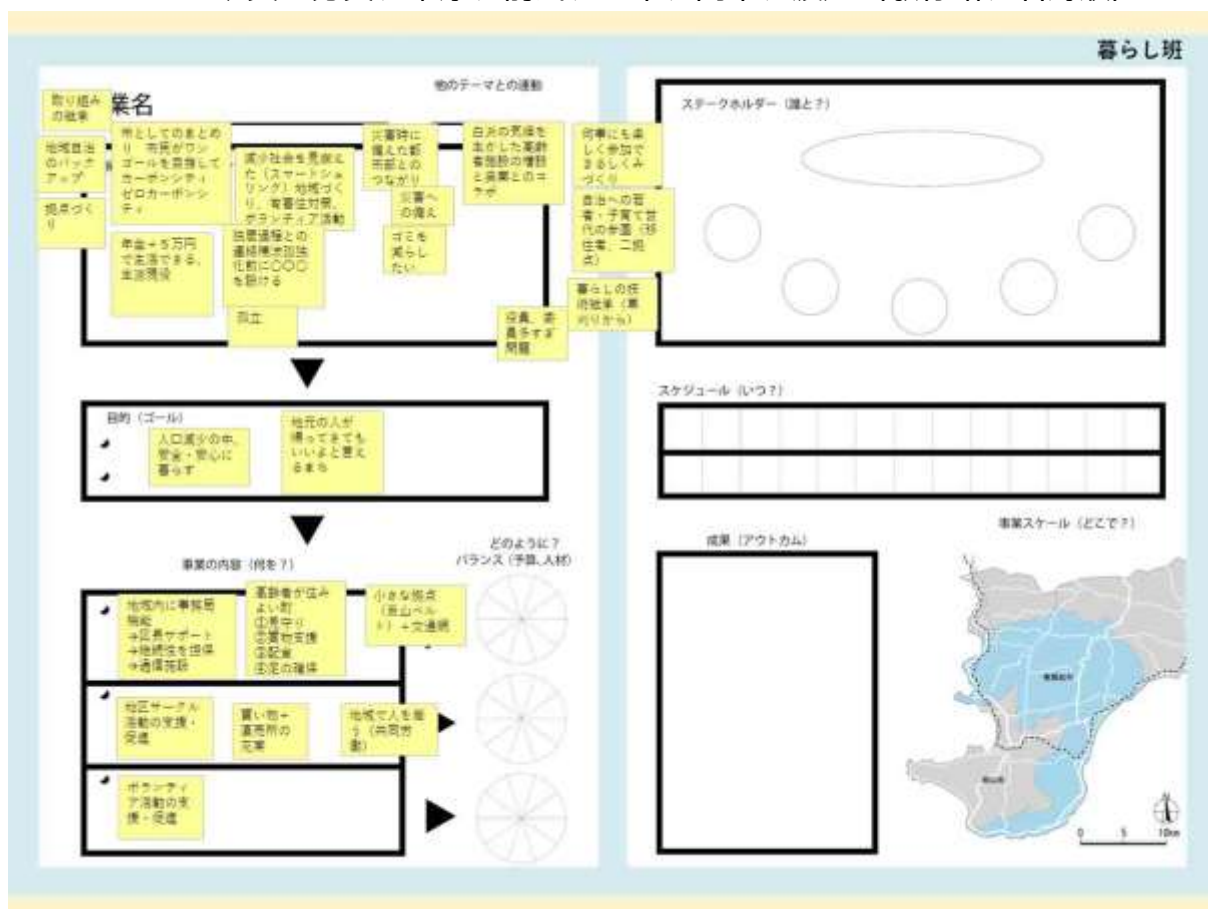
- ・ 課題を検討するにあたりターゲットを設定した。移住を希望する人、地元の出身者でUターンを希望する人たちに、情報を伝えられることが大事になる。
- ・ 空き家の活用やライフステージの情報発信、情報をいかに繋げていくかが課題になる。そもそもの目的としては、移住を希望している人にそのような情報を伝えるハードルをいかに下げられるかということが重要になる。
- ・ 移住者希望者のハードルを下げるため、お試しで移住体験ができるようなシェアハウス・ゲストハウスの運営や移住者と地元の方をマッチングできるイベントの開催、それから移住促進するための区のマニュアルなど、地域の特徴を伝えられるような情報伝達が重要だと考えた。
- ・ さまざまな提案がありますが、まずは上記の課題と事業について絞って、提案していきたい。

第3回に向けたコンサルタント意見

- ・ 移住・定住のモデルケースを考えて課題を整理したことで、具体的なターゲットや事業イメージを共有することができた。移住希望者を定住まで繋げるために、ペルソナ（具体的な人物像：年齢・性別、家族構成、仕事など）を設定した上で、モデルケースを考えても面白いと思う。
- ・ 空き家の活用や情報伝達など、目に見える課題は事業提案がしやすい。アイデアベースの事業も突破口に成り得るかもしれないが、「移住希望者が抱えるハードル」「移住者が市外に引っ越す理由」をもう少し深掘りして考えてみてほしいと思う。「移住希望者が何を求めているのか」「ハードルはどこにあるのか、高いのか、低いのか」「一つの事業で解決できるのか、複数事業が関わるのか」など、具体的に考えて次回の話し合いに繋げてほしい。
- ・ 次回以降は、ステークホルダー（利害関係）も議題になるが、できるだけ地域の人を巻き込みながら各主体の役割分担や、事業の広がりを地図に落とし込んでいけたらよいと思う。

【暮らし班】

班員：芳賀、栗原、前川、八木、高木、渡辺（敬称略、名簿順）



主な意見

解決したい課題

【人口減少・少子高齢化に対応した地域づくり】

- ・縮小社会を見据えた地域づくり（スマートシュリンク※）が必要。農地を自然に返し、生活圏を狭くする。有害獣対策にはボランティア動員や里山ベルト（グリーンベルト）を導入して対応。「偉大なる縮小」が必要。（※注：人口減少下で住民の生活の質(Quality Of Life)を維持・向上していくための地域マネジメント手法の総称。）
- ・小さな拠点＋交通網を整備して、地域で生活に必要なものが揃い、交通の足を確保できるまちとすることが必要。賢く縮小していくことが重要。
- ・市としてのまとめ、市民がワンゴールを目指すことが必要。例えば、徳島県上勝町のようにゼロカーボンシティ、ゼロカーボンシティズンを目指すなど。旧7町村の相互交流も必要。
- ・一方で、7つのまちのまとめを重視し、まちごとの競争も必要。老人会、子ども会など既存組織の活動促進、地区のサークルやボランティア活動の促進など。
- ・地元の人は「ここには魅力がない」と感じているが、東京や欧米型の生活スタイルは限界。65

歳以上を非生産年齢人口とせず、80歳までは生涯現役世代と捉える。(芳賀さんのレポートより)

【地域の絆・顔の見える地域づくり】

- ・ 普段の買い物や子どもの遊び場のために車で市外へ出てしまうため、南房総市に暮らしている実感がない。若い人が帰って来るには地域の絆が大事。
- ・ 2019年の台風被害で地域のあり方が問われた。「顔の見える地域づくり」「日常と非日常を分けない生活スタイル」を市民協働で実践することが必要。顔の見える関係づくりがすべてに勝る防災である。自助・共助のため、自主防災機能を地域の実態に合わせて向上する必要がある。(芳賀さんのレポートより)
- ・ 自治のために、行政区の縦割り解消が必要。区長は高齢者ばかりで女性がおらず、若者の参画も少ない。女性や若者、子育て世代(移住者、二拠点生活者も)の意見が反映される仕組みが必要。
- ・ 役員・委員が地域の決まった人に偏っていることが問題。
- ・ 区長が変わっても事業の継続性を保てるよう、行政区に事務局機能を付加することが必要。
- ・ 何事にも楽しく参加できるしくみづくりが必要。子どもや移住者も含め、好きなこと、楽しくできることは続く。長く続ければ地域のことが分かる。
- ・ 行政側のICTの活用推進により、住民とのやりとりにおいて、オンライン会議の活用も必要。
- ・ 暮らしの技術の継承が必要(草刈りから)。土木や林業などの担い手が地域にいないため、災害時の倒木を切れない場合もあった。
- ・ ボランティアでは限界がある。生業以外で地域における生活のための仕事に人を雇って、共同労働が必要。

【その他の課題】

- ・ 災害時に備えた都市部とのつながりづくりが必要。平常時から農家と都市住民との関係をつくり、何かあった時に食を担保し、かつ農家を支える。
- ・ 買い物難民のために、直売所を充実。セブン宅配などが参考になる。
- ・ 独居家庭との連絡方法が課題。地域内での孤立や孤独死を防ぐ。
- ・ 市民一人ひとりが元気になることが重要。高齢者が住みよいまちとするため、見守りや買い物支援、給食センターを活用した配食、移動の足の確保など。働く人のスキルアップ、子育て支援や教育の充実など。
- ・ 白浜の気候を生かし高齢者施設の増設と農業とのコラボ。
- ・ ゴミを減らしたい。間伐材や竹のチップを使って生ゴミを減量。里山保全にもつながる。

目的 【<u>人口減少に対応した安心・安全で、帰ってきたくなるまちとする</u>】 ・人口減少の中、地域の良さを活かして、安心・安全に暮らせるまちとし、地元の人が帰ってきてもいいよと言えるまちにする。
事業の内容 【<u>地域自治のバックアップ</u>】 ・地域内に事務局機能を付加し、区長をサポートして、事業の継続性を担保する。 ・行政区で地域づくりの協力者を雇う。(共同労働)

発表の概要
・住みやすいまちにするための課題が多すぎる。当面の目標として、人口減少の中、安全・安心に暮らせるまちづくり、地元の人が「帰ってきてもいいよ」と言えるまちづくりをしようではないかと話し合った。 ・今までは行政区の区長が交代することで事業が継続しないことがあったが、各行政区に事務局を作ってはどうか。当然費用が伴うが、市にお願いし、各事業を継続させる。 ・各行政区において、どういったことをやったら、一番安心して暮らせるのか、友達が帰ってきてくれるのか、移住者が増えるのかを話し合って決める。 ・例えば白浜町では16行政区あるが、これをまとめて話し合う場をつくるのが大事。

第3回に向けたコンサルタント意見
・暮らし班は、課題に関して多くの意見交換をした。スマートシュリンク、地域の絆などのキーワードが挙げられたことから、<u>人口減少に対応し、行政区などのまとまりの中で、安心・安全に、生涯現役で暮らせるまちを市民協働でつくることを重視していると言えるのではないか。</u> ・このような「課題」認識と「目的」を踏まえた「<u>南房総らしい暮らし</u>」について、最終的にまとめを作成していく段階では、詳細に記載することで、をしておくことが望ましいと考える。 ・その上で、事業については、<u>一つは地域自治のバックアップのために、行政区に事務局機能を付加することが挙げられた。</u>次回は、現状市がすでに取り組んでいること（地域づくり協議会への地域づくり支援員の配置など）も踏まえて、<u>新たに提案できる事項を考える必要がある。</u>その際、大井区などの先行事例を参考に、地域を指定してモデル的に実施する提案も考えられる。 ・加えて、地域自治のための組織に限らず、「<u>暮らしの技術</u>」の継承のために、色々な人が楽しみながら参加しやすい仕組みづくりの提案も考えられないか。例えば、行政区ごとに、草刈りや間伐の体験のほか、避難訓練など防災関連、ゴミの減量など環境関連をテーマにした体験・交流イベントを、区内あるいは区外（市内、都市部等）と連携して実施することなども考えられるのではないか。

(3)第3回市民ワークショップ意見概要

この提案書（たたき台）は、第2回、第3回ワークショップでの話し合いをもとに作成したものです。この提案書と事業シート（模造紙）を使って第4回市民ワークショップで発表していただきます。

- ・ **赤字**は、メンバーのみなさんが特に強調された点等です。発表の際のポイントとして、ご活用ください。
- ・ **黄色ハイライト**は、第4回ワークショップまでに各班の皆さんに考えていただきたい所となります。
- ・ **グレーハイライト**は、模造紙大の事業シートには反映できていないことですが、提案の意図や内容などをより分かりやすくするため、皆さんのご意見からコンサルタントが補足したものです。
- ・ 各項目をご覧ください際の注意点は、本たたき台の最終ページ「第4回に向けたコンサルタント意見」に記載しましたので、あわせてご確認ください。

しごと班

班員

佐久間、川名（三）、岡本、川名（真）、藤井、落合、鈴木

（敬称略、名簿順）

しごと班の提案

(タイトル)

1. 私たちの思い

【稼げる仕事づくりが必要だ！】

- ・ **稼げる仕事はあるのか？** 稼げる仕事づくり、市内で働くメリットが必要ではないか。
- ・ 跡を継ぐ人がいない。**人財不足**。他地域から働きに来たくなる魅力づくりが重要だ。
- ・ 誰にとっての仕事？地元の若者？移住者？他地域の人？
- ・ 既存産業（特に農林業）や、介護に従事する人財が不足している。
- ・ 農業や介護の求人はあるが、**十分に稼げない**。何か良い方法はあるか？
- ・ **就きたい仕事**が地元にな**い**、だから出ていくのではなく、仕事**がなければ自分で創業すればよい**。創業の環境づくりとともに、**子どもの頃からの意識づけが大切だ**。

【(そこそこ) 稼げる働き方づくりが大切だ！】

- ・ 南房総市で暮らそうという人には、**そこそこ稼げればよい**、という人が多くないか？
- ・ **趣味が仕事**になる、そんな流れを促せば。
- ・ **短時間・短期間の仕事を組み合わせ**、(そこそこ) 稼げる働き方が出来ないか？
- ・ **リモートワーク普及の流れも追い風**になるのでは。
- ・ 組み合わせると言っても、ステレオタイプではない。**きめ細かな対応・マッチング**が要。
- ・ 組み合わせるにあたっては、**地元の仕事が見えない・ニーズが分からない**という問題。

【南房総らしい暮らしの実現、地域課題の解決につながる仕事づくりが良い！】

- ・ 人口減少と少子高齢化が進んでいる。**地域課題の解決に取り組む仕事づくり**が必要である。
- ・ 農業とは？**職業としての「農」、農的生活を楽しむ「農」**か？
- ・ かつての南房総市は、**農業を軸として暮らし、コミュニティ**が成り立っていた。
- ・ **子どもの頃からの意識づけが大切**。子どもたちが、地域の産業や仕事について、学ぶ機会があれば良い。
- ・ その際、**単なるイベントとしての体験ではなく、仕事をするカッコいい大人を、しっかり見て、感じて、いいなと思ってもらえるように**。

2. 具体的な内容

【解決したい課題】

① （後継者・創業者といった）「人財」の育成

- ・ 主に農業であるが、家業を継ぐ人がいない。後継者不足である。求人はあっても、介護に従事する人財も不足している。
- ・ 仕事があれば自分で創業すればよい。起業・創業、事業継承を志す人財を育てる必要がある。仕事をつくろう。

② （労働力という意味での）「人材」のマッチング

- ・ 少子高齢化と人口減少の中、人材は不足している。若者・女性などが仕事に就きやすい環境づくりが大切である。仕事の見える化・見せる化が重要である。
- ・ 繋がる仕事を上手く組み合わせることができないか。一つひとつの仕事は稼げなくとも、組み合わせるとまとまった収入を得られるようにできないか。

③ 南房総らしい仕事×暮らしの実現

- ・ そこそこ稼げればよい、趣味が仕事になる流れを促せばよい。リモートワーク普及も追い風である。
- ・ 地元の仕事への興味・関心を育てることが大切である。子どもの体験機会・学習機会をしっかりと設けていく必要がある。

【目的】

【事業の内容】

① 市内の子どもが対象：体験と学びの機会拡充

- ・ 就きたい仕事がないからと言うが、大人たちは、子どもたちに「南房総での仕事の良さ」を見せているか？伝えているか？「稲刈り体験」などの体験に留まらない、「南房総での仕事」を知り、学び、関心を持って貰う取組を、学校教育の中などで拡充する。
- ・ 同様に、仕事がないならつくる、といった起業家精神を育む取組を実施する。→【他のテーマとの協働（横串）】「子育て」に関連。

② 市民・市外在住者が対象：南房総らしい仕事と暮らしの機会提供

- ・ 例えば有害鳥獣対策×民宿業の活性化として、ハンターたちに民宿に泊ってもらい、南房総を味わってもらう等の既存の取組を広く周知、拡大する。仕事が地域課題の解決に資するものであればなお良い。
- ・ 南房総らしい、農林漁業×南房総での暮らし×趣味×複業を促進する。（そこそこ）稼げる環境をつくる。→【他のテーマとの協働（横串）】「暮らし」に関連。

③市民・市外在住者、事業者が対象：起業・創業、事業継承、事業改革の専門的なサポート

- ・ 商工会議所や地域金融機関などの専門的な知識を有するスタッフにより、起業・創業、事業継承、事業改革（生産性向上・生産性アップなど）をサポートする。
- ・ 起業×事業継承×複業促進が移住・定住に繋がる。すべてが繋がるようにすれば良い。→【他のテーマとの協働（横串）】「移住・定住」に関連。

④市民・市外在住者、事業者が対象：「複業」を促す仕組みづくり

- ・ 複業を促進するインターネット上の仕組みをつくる。複業バンク・複業クラウド等。農林漁業や福祉など、産業ごとに人手不足を埋める視点でマッチングを図る。
- ・ インターネット上の仕組みのみならず、実体としての場をつくる。しごとカフェ等。事業者においては、アウトソーシングできる「小さな仕事づくり」も大切である。

⑤市民・市外在住者、事業者が対象：仕事の「見える化」「見せる化」を促す仕組みづくり

- ・ インターネット上の仕組みや、しごとカフェ（ブース）などにおいて、仕事の「見える化」「見せる化」を図る。後述する推進組織が、ハローワークや市内事業者との連携のもとに行う。なお、見える化された仕事のマッチングは、後述する推進組織の『コーディネーター』を中心としたステークホルダーがサポートする。

【事業のステークホルダー（協働実施者）】

- ・ 公共公益的組織：ハローワーク、DMO（観光地域づくり法人）、地域商社、商工会、人材バンク、市役所、小中学校・高等学校
 - ・ 事業者・団体：農林水産業事業者（農林漁家）、福祉・介護事業者、宿泊業者（民宿）、地域金融機関、その他市内の事業者、農業支援センター・おせっ会（館山市）等の団体
 - ・ コミュニティ：地域のプラットフォーム→【他のテーマとの協働（横串）】「暮らし」関連。
- ※上記を調整する『コーディネーター』の役割が非常に重要。

【スケジュール】

【事業の成果（アウトカム）】※他に考えられる成果は？

①人口減少が抑制される。

- ・ “南房総で働いてみたい” “南房総で働いて（そこそこ）稼いでいける” という子どもと大人が増えれば、南房総での仕事と生活が身近になり、子どもの流出を止めるとともに、若者のU I Jターン増加に繋がる。

②産業が振興される。

- ・ 起業家など産業人財の育成が進むことから産業が振興し、マッチングにより労働力不足が改善される。

発表の概要

- ・仕事班でというより、南房総で「解決したい課題」は、人財不足。仕事を作りだしたりすることが不足している。労働力（人手）不足については、南房総らしい仕事というのがなかなか見えていなかったりして、わからないということが課題だ。
- ・子どもに「地元にはこういう仕事があって、南房総でも自分らしく働けるんだよ」ということを、わかってもらうことを考えた。南房総でも働けるという気持ちをもってもらうことが必要。
- ・それに伴って、南房総らしい仕事の見える化が大事でしっかりと見せていくことができると、子どもの流出も止まるのではないか。移住者や地元でも南房総の魅力を感じていない人に南房総の仕事って魅力あるよねと思ってもらえるようになるといい、と考えた。
- ・人材バンクとか、複業、小さな仕事を複数組み合わせる複業しやすい環境づくりが必要。稼げるようになると人材不足、労働力不足が解消されていくかと考える。
- ・子育て班では公園の話、前回の暮らし班からは事務局を地域におけたらいいというお話が出た。私たちも、協働で折り合いを付けていけると良いと考えている。
- ・とりまとめるコーディネーターが重要だよね、という話になった。それは誰がやるのかという見当たらぬので、次回検討したい。
- ・最終的な「成果」としては、南房総での仕事や生活が見近になって、やってみたいという子どもが増えて子どもの流出を止める・戻らせるとか、そういう仕事をやってみたいという大人も増えて、リターン、Iターン増加に繋がるといいなと考えた。
- ・そうして、労働力不足が解消され、課題である20歳から39歳の世代の方達の人口不足が解消していくという、壮大だがそのような成果を考えたい。

第4回に向けたコンサルタント意見等

- ★本文中の赤字は、メンバーのみなさんが特に強調された点等です。発表の際のポイントとして、ご活用ください。
- ★（タイトル）＝事業名が決まっていないので、メンバー各自で次回までに考え、第4回ワークショップで決めましょう!!例えば、南房総らしい人づくり・仕事づくり・マッチング事業、など。
- ★【私たちの想い】は、提案の前提となるメンバーの考えを整理したものです。第2回ワークショップの際に「課題」として出され、第3回の課題整理の際にいったんシートから外された付箋紙を中心に再構成してみました。
- ★【課題】は、第3回ワークショップでの議論と整理を踏まえ3点から再整理し、【私たちの想い】と繋がるよう補足しました。
- ★第3回ワークショップでの整理の結果、【目的】欄から付箋紙がなくなっていました。冒頭の（タイトル）＝事業名（決まっていない）と繋がるよう、メンバー各自で次回までに考え、第4回ワークショップで決めましょう!!例えば、南房総らしい人と仕事を育て、それらをマッチングさせる!など。（タイトルの裏返し表現でOK）
- ★【事業の内容】は、第3回ワークショップでの議論と整理を踏まえ、①教育の観点と⑤見える化・見せる化の観点を加えて5本としました。

★【事業のステークホルダー（協働実施者）】は、例えば「公共公益的組織」などの仕分けを入れました。

★【スケジュール】がしっかり話し合われていないので、例えば、「事業のステークホルダー（協働実施者）」から成る組織（仮称：南房総ひと・しごと育て協議会）を〇年度までに立ち上げる等、メンバー各自で次回までに考えましょう。なお、南房総市後期基本計画の計画期間は令和5～9年度です。

★【事業の成果（アウトカム）】については、これ以外にないか、メンバー各自で次回までに考えましょう。

★最後に、発表の順番と分担につき、第4回の前半にてしっかりと確認しましょう。

今のところ、岡本さんが1番手で問題提起としか決まっていません。私の勝手な試案ですが、

→川名（真）さんが人手不足とミスマッチの実情を補足

→事業の中身については藤井さんが全般を話し、

→川名（三）さん（民宿×ハンターなどの南房総らしい組み合わせの実例）、落合さん（小さな仕事がマッチングできればいいのに）などを話し、

→続いてステークホルダーと立ち上げスケジュールは佐久間さん

→最後にもう一度藤井さん・・・

といったことも考えられようかと思います。

この提案書（たたき台）は、第2回、第3回ワークショップでの話し合いをもとに作成したものです。この提案書と事業シート（模造紙）を使って第4回市民ワークショップで発表していただきます。

- ・ **赤字**は、メンバーのみなさんが特に強調された点等です。発表の際のポイントとして、ご活用ください。
- ・ **黄色ハイライト**は、第4回ワークショップまでに各班の皆さんに考えていただきたい所となります。
- ・ **グレーハイライト**は、模造紙大の事業シートには反映できていないことですが、提案の意図や内容などをより分かりやすくするため、皆さんのご意見からコンサルタントが補足したものです。
- ・ 各項目をご覧いただく際の注意点は、本たたき台の最終ページ「第4回に向けたコンサルタント意見」に記載しましたので、あわせてご確認ください。

子育て班

班員

小川、押元、白井、川名、鈴木、加藤

（敬称略、名簿順）

子育て班の提案

(タイトル)

1. 私たちの想い

【子どもが戻ってきたい地域にしよう】

- ・ 地元の魅力（資源・人）を知る教育により、子どもが地元に興味を持つようにする。
- ・ 仕事と子育ての連携強化により、子どもが地域に戻ってくるようにする。

【市全体として子育てに注力する】

- ・ 子育てを最優先として、市全体が覚悟を持って進める必要がある。
- ・ 児童手当、補助金増額など、子育て世代向けの財源を大きく予算化する（子どもの数が少ないため大きな負担にならないはず）。

【丁寧なニーズの把握が重要】

- ・ 取組を進めるには、まず、子育て世代のニーズ（経済的支援かハードかソフトか）や、子育て世代の働く女性が仕事・家庭・子育てを両立するためのニーズを把握する必要がある。
- ・ 幼少期や中高生など、子育ての各段階で特有のニーズがあるが、その時期を過ぎれば、忘れ去られてしまい、ニーズが共有されないという問題点もある。



市民が地域について話し合い、意見が反映できる場所や機会をつくることで、交流の拠点が生まれ、市民・行政・事業者を含めて市全体として子育てを支援していく

2. 具体的な内容

【解決したい課題】

①子育て世帯の交流が少ない

- ・ 小さな公園の古い遊具が撤去されるなど、子どもの遊び場や公園・交流する場所が少なくなっている。よって館山や富津など市外の大きな公園に車で出かける子育て世帯が多い。
- ・ 目玉となる遊具や広場を備えた公園の整備が必要である。
- ・ 小中学生のための遊び場としては、学校の校庭を開放するとよい（既に取組あり）。
- ・ 過疎化により学校当たりの児童数が少なくなっているが、ある程度の集団規模を維持した方が、子どもに良い影響（集団スポーツ、人との交流増加）があるのではないかと。
- ・ 子育て環境において、元からの居住者は転入者とではギャップがある。転入者は近くの祖

父母からの支援を受けられなかったり、子育ての情報が入手しにくかったりするため、子育てサービスがまとまった分かりやすい地図があると良い。

②ニーズの反映がされにくい

- ・ 幼少期や中高生など、子育ての各段階で特有のニーズがあるが、その時期を過ぎれば、忘れ去られてしまい、ニーズが共有されないという問題点もある。

【目的】

①市民のニーズが反映された公園をつくり、運営する



②交流の拠点となる子育て重点地区の設置

- ・ 目玉となる大型の公園整備（ハード）と、各種イベント開催（ソフト）を組み合わせ、交流の拠点となる子育て重点地区を設置する。



③交流が生まれる

【他のテーマとの協働（横串）】

- ・ 「子育てしやすいまち」をキャッチフレーズとしてシティプロモーションで大胆に打ち出す。（流山市の事例参照）
- ・ 上記取組により、市内に在住の子育て世代の満足度が上がれば、市外からの評判もよくなり、移住者が増えるのではないかな。

【事業の内容】 ※目的①に焦点を当てる

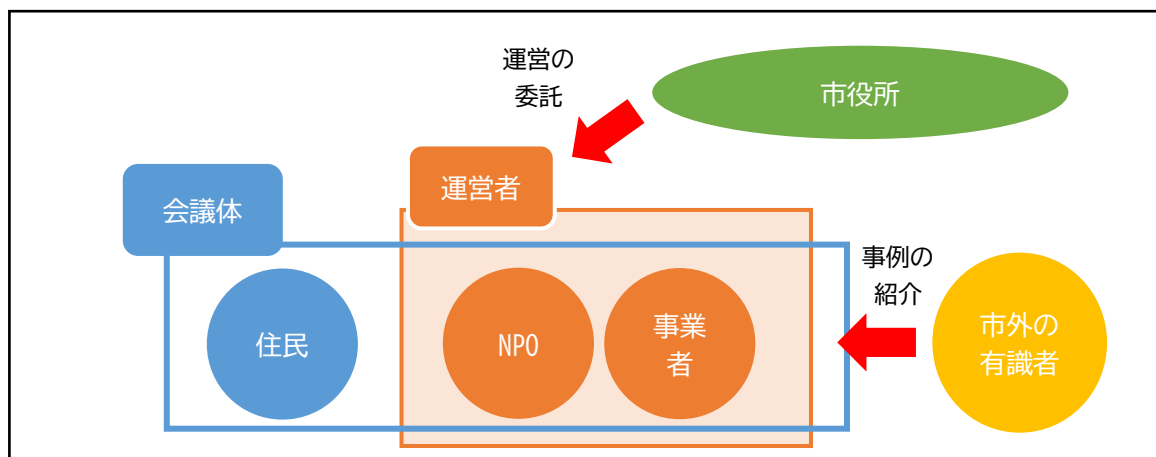
（１）公園について議論する会をつくる

- ・ 公園のハード整備が進んでいる部分があるが、ソフトの部分や運営面で、市民や事業者が議論する場をつくることで、意見を反映させる。
- ・ 他自治体の公園の先進事例を学び、市民のニーズを取り入れた上で、南房総ならではの公園を考える。

議論の詳細

テーマ	・南房総ならではの公園を考える
議論する点	・ターゲット層は誰か（案：今子育てしている市民） ・運営者は誰か（案：行政がフットワークの軽い民間事業者に委託する） ・必要な機能は何か ・ニーズの収集方法
ニーズ	・普段気軽に遊べて、ごはんを食べられるような公園 ・子どもが遊べる広場や遊具 ・イベントでは指導員が必要⇒世代を越えた交流が生まれる
場所	・車を持っているターゲットが多いため、アクセスはあまり問題ない。 ・子どもが少なく分散しているため、各地に小規模の公園を作っても交流は生まれにくい。交流拠点となる大きな公園を市内に1つ作り、人を集める。 ・案：旧南三原小学校等の跡地で準備が進んでいる公園
課題	・遊具が老朽化すると危険であるため適切な維持管理方法と維持管理者が必要。 ・財政的に持続可能な仕組みが必要。そのためには、人が集まる規模の公園にする必要がある。
取組・イベント案	（参考：すでに行っている取り組み） 学校教育において自然体験や地域との交流を取り入れている

【ステークホルダー（関係者・協力者）】



- ・行政：ハード整備
- ・事業者、NPO：イベント運営、公園の維持管理
- ・市民、事業者、NPO：ありたい公園の議論
- ・市外の有識者：事例紹介

【スケジュール】

(※詳しいスケジュールは議論が必要)

	R4	R5	R6	R7	R8	R9
①ニーズ調査						
②行政との調整						
③議論の参加者 募集						
④議論						
⑤あるべき公園 の姿が						
⑥議論参加者の 中から運営者 が出てくる						

【成果】

遊び場ができる

↓

交流が生まれる

↓

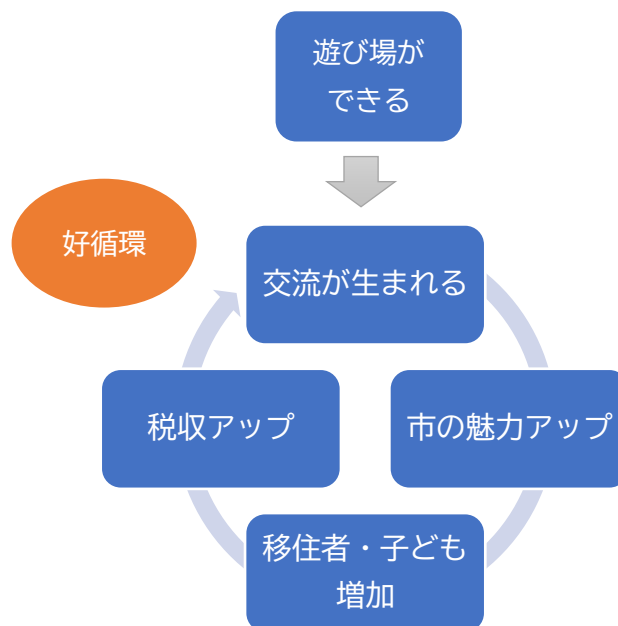
市の魅力がアップする

↓

移住者や子どもが増える

↓

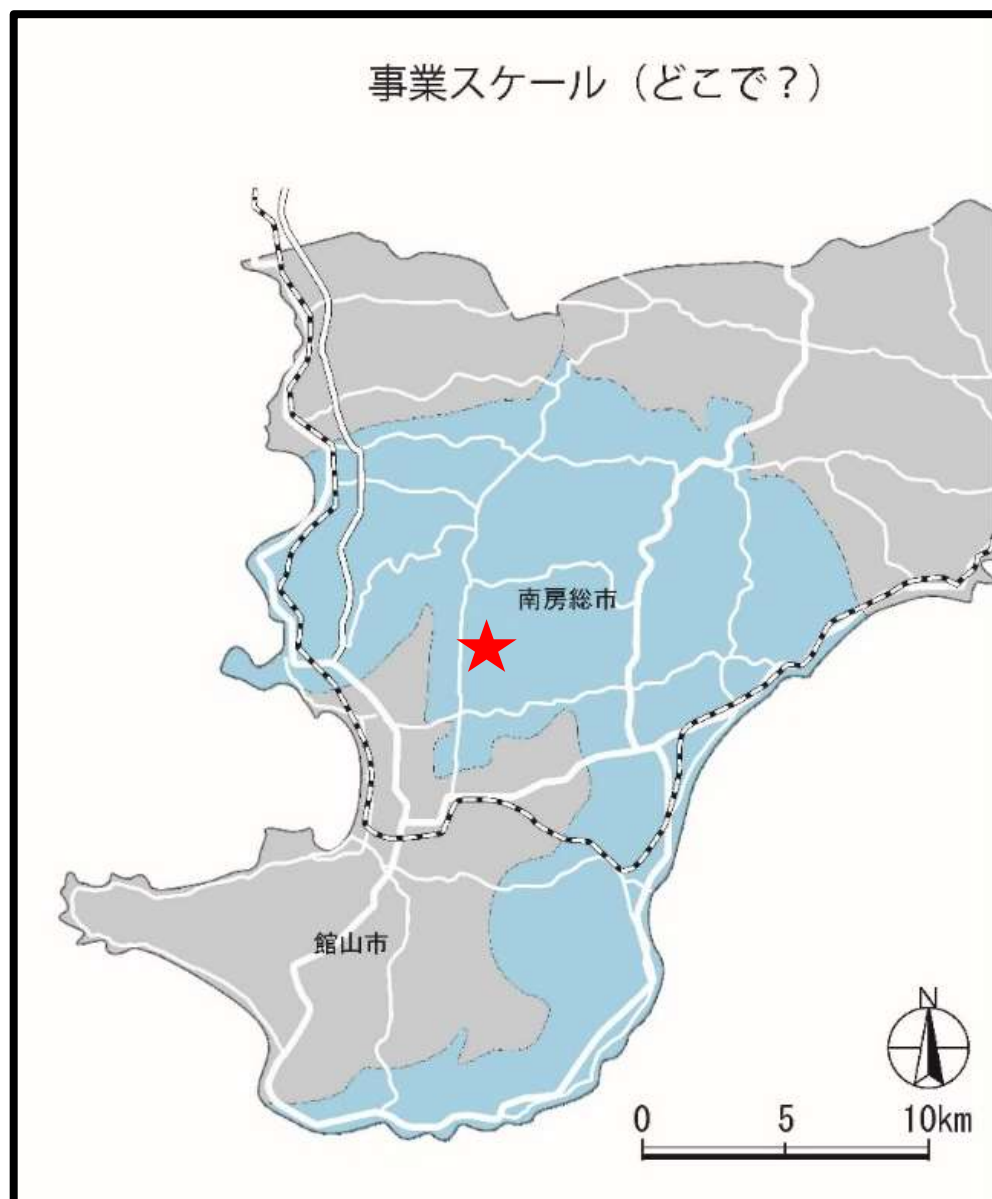
税金が増える



<より具体的な指標（数値で測れるもの）>

具体的な指標	R3	R4	R5	R6	R7	R8	R9

【事業スケール】



発表の概要

- ・ 前回のワークショップでも出た、「解決したい課題」としては、交流の機会がない、子供の遊び場がない、特に公園や遊具がないということが議論された。
- ・ 「ゴール」としてはそういった子育て重点地区みたいなものを活用という話も出たが、さらに具体的に言うと、南房総市には良い公園がないので、そこについて深く議論した。
- ・ 今、市の方で公園整備計画が進んでいるが、なかなか市民のニーズとか課題が反映できていないのではないかという声が出た。具体的な事業としては、本気で公園について考える。市民が本気で考えて、それを行政と一緒に形にしていく会を作っていった方がいいのではないか。市役所の方にも設計とか利用とか考えてもらっていると思うが、市民も一緒に考えて、いいものを作る。そして、作った後のことも考える会を作る。
- ・ 例えば、先進事例の方を呼んでお話をしてもらおうなど、そういう組織を予め、ちゃんと作ってそこに運営を任せるみたいなのでもいいのではないかな。また、南房総ならではのレジャーができる公園を考えると、そんな話がありました。
- ・ 「スケジュール」については、もう整備計画が出ている公園もあるので、そこに改良の余地があるのかわからないが、それらも含めてもし入り込めるのであれば、そこにちゃんと声を反映させるような場を作った方がいいのではないかな。
- ・ 「成果」としては、そのような遊び場ができれば、交流が生まれて、市の魅力も上がって移住者や子どもの数が増えて、税収もアップする。そしてアップした税収で交流を生んで、公園を整備していくという流れができるとよいのではないかな。

第4回に向けたコンサルタント意見等

- ★「私たちの想い」では、【子どもが戻ってきたい地域にしよう】【丁寧なニーズの把握が重要】【市全体として子育てに注力する】という、議論で出てきた意見をつなげてストーリーとしました。ご確認ください。
- ★事業を表す簡潔なタイトルを考えましょう。
- ★必要なステップについて議論はされましたが、さらに具体的なスケジュールに落とし込んでみましょう。
- ★「成果」について、長いスパンでの好循環は議論されましたが、より直近の具体的な指標（数値で測れるもの）も考えてみましょう。
- ★発表は全員で分担ということでしたが、パート分けとしては、「私たちの想い」「解決したい課題と目的」「具体的な事業内容」「ステークホルダーとスケジュール」「成果（＋まとめ）」などが考えられます。

この提案書（たたき台）は、第2回、第3回ワークショップでの話し合いをもとに作成したものです。この提案書と事業シート（模造紙）を使って第4回市民ワークショップで発表していただきます。

- ・ **赤字**は、メンバーのみなさんが特に強調された点等です。発表の際のポイントとして、ご活用ください。
- ・ **黄色ハイライト**は、第4回ワークショップまでに各班の皆さんに考えていただきたい所となります。
- ・ **グレーハイライト**は、模造紙大の事業シートには反映できていないことですが、提案の意図や内容などをより分かりやすくするため、皆さんのご意見からコンサルタントが補足したものです。
- ・ 各項目をご覧ください際の注意点は、本たたき台の最終ページ「第4回に向けたコンサルタント意見」に記載しましたので、あわせてご確認ください。

移住・定住班

班員

荒川、福原、佐々木、澤、山木、稲葉

（敬称略、名簿順）

移住・定住班の提案

(仮) 移住者トータルコーディネート大作戦！**1. 私たちの思い**【移住・定住には具体的なイメージが重要】

- ・移住者を増やすためには、漠然としたシティプロモーションだけではなく、具体的なターゲットを設定した魅力的な移住・定住プランが必要となる。
- ・移住者が実際に住むまでの流れを想定し、具体性を持たせた課題を解決しなければならない。→**ターゲットを設定した上での移住・定住促進事業を提案する。**

【課題は山積み：市内の受け皿、移住者が感じるハードル】

- ・現状、課題が山積している。南房総市で移住者を受け入れる「**受け皿**」としての課題と移住者が漠然と感じる「**移住へのハードル**」を下げるべきである。

(受け入れる側の課題)

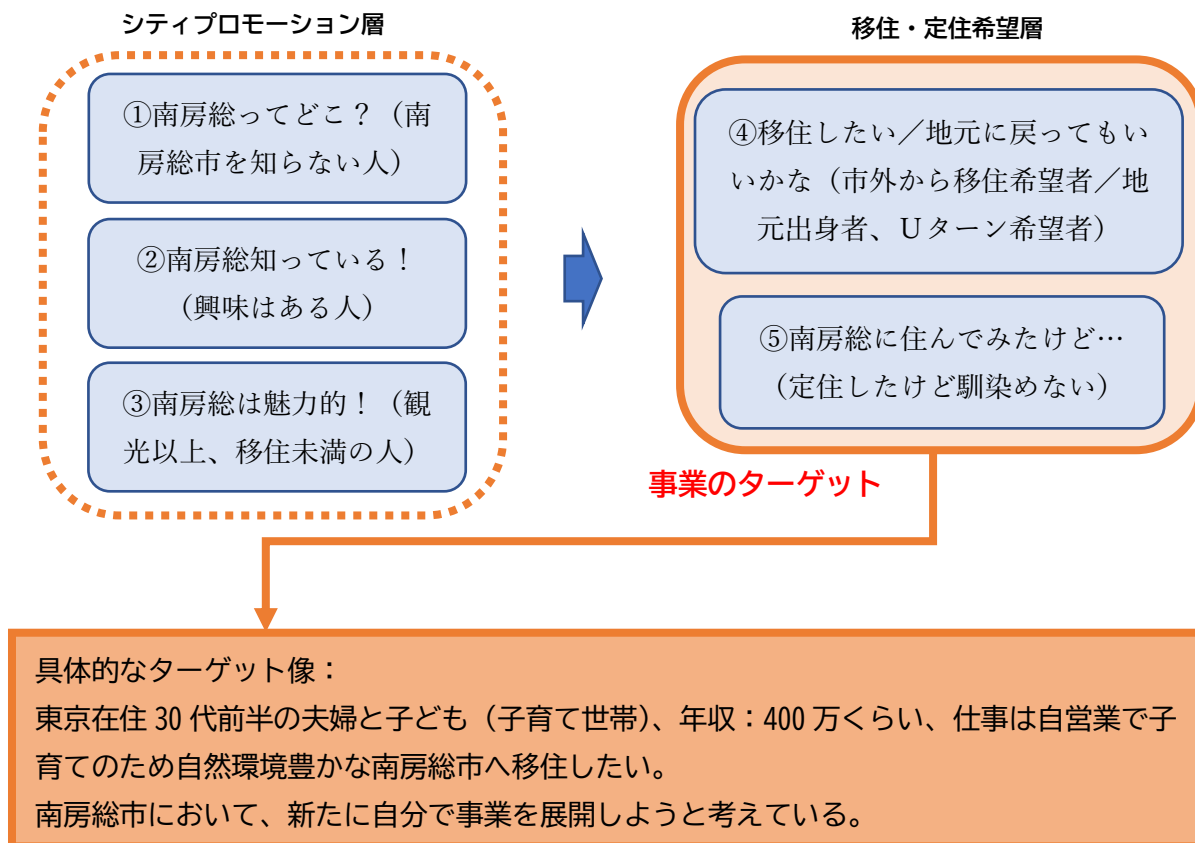
- ・空き家を持っている人が、家を貸したがない。(貸し手が不安を抱えている。)
- 空き家の**貸し手同士の情報共有の場**が少ない。
- ・もともと地域に住んでいる人が、移住者が市内に住むことを拒んでいる気がする。(若い人が移住してくるのを拒む気風もある。)
- ・海のスポーツ(SAP、サーフィンなど)を通じたテーマコミュニティは盛ん。
- 移住者コミュニティと既存コミュニティの繋がり**が少ない。

(移住者へのハードル)

- ・そもそも適当な物件がない。空き家はボロでは住めない。(空き家をそのまま貸し手も**魅力的な移住**ないしは定住に繋がらない。)
- ・実施に南房総市に住むということはどういうことか、移住希望者が想像することは難しい。移住する資金が少ない。(お金がない。)
- 必要な情報が伝わっていない。**

2. 具体的な内容

- ・移住希望者の段階によって「解決すべき課題」が異なるため、課題とターゲットを整理した。



【解決したい課題】

- ・ライフスタイルの情報発信が観光PR寄りで、実際に住むことを想定した内容ではなく、シティプロモーションよりの情報発信となっている。
- 観光プロモーションに力を入れているが、地域活動やライフスタイルのPRが弱い。
- ・南房総市への移住希望者は多いが、賃貸物件が不足しているため市外へ流出してしまう。
- 古い物件だけを見ても、そこに住みたいと思わない現状がある。
- ・移住を考えている人への総合的な情報不足がある。
- 移住希望者に対する地域性の見える化が必要

【目的】

- ・移住希望者のハードルを下げる。
- ・移住希望者が市内に住むための受け皿を整える。

【事業の内容】

(1) 受付窓口事業

- ・南房総市への移住を希望している方々に向けた総合的な受付窓口を開設
- ・対象は、移住希望者だけではなく、市内で空き家を所有している所有者も含まれ、貸し手の不安解消にもつなげる。
- ・マッチングサイトの構築（空き家と移住希望者）

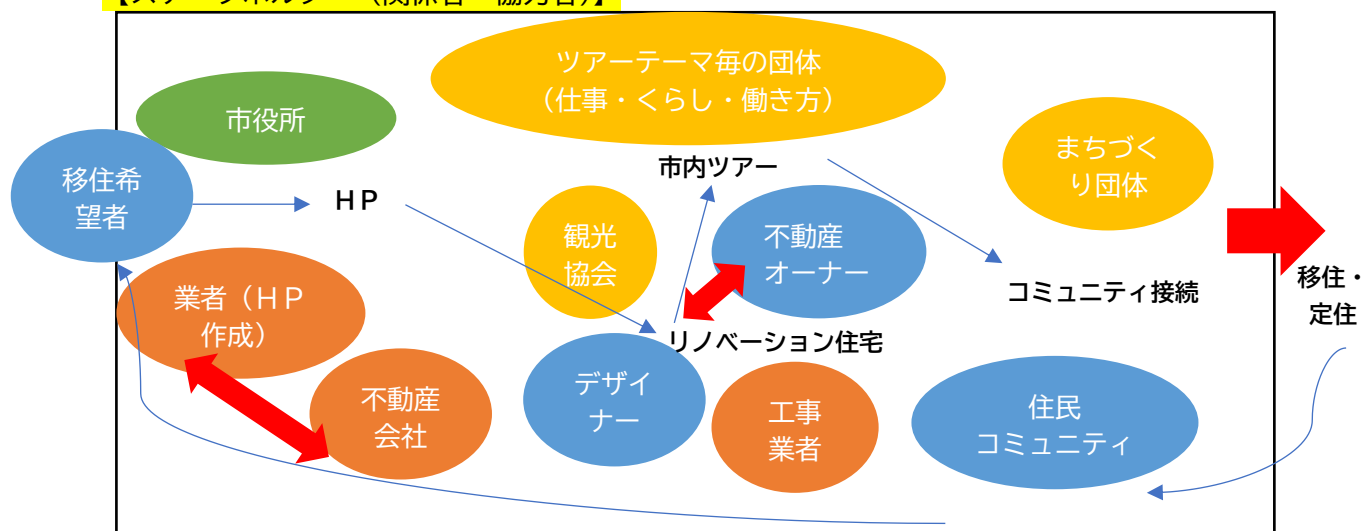
(2) 暮らし提案事業

- ・移住希望者へ具体的な暮らし方を提案する。
- ・魅力あるリノベーション（シェアハウス）
- ・共同ワークショップ（空き家のリノベーション：土壁塗り、生活体験：農業や林業体験ワークショップなど）
- ・テーマ毎のツアー＋マッチング

(3) フォローアップ事業

- ・市内の事業者や移住希望者へのフォローアップを行う。
- ・移住者が既存コミュニティに入れるよう支援。

【ステークホルダー（関係者・協力者）】



（※具体的なステークホルダーについて議論が必要）

【スケジュール】

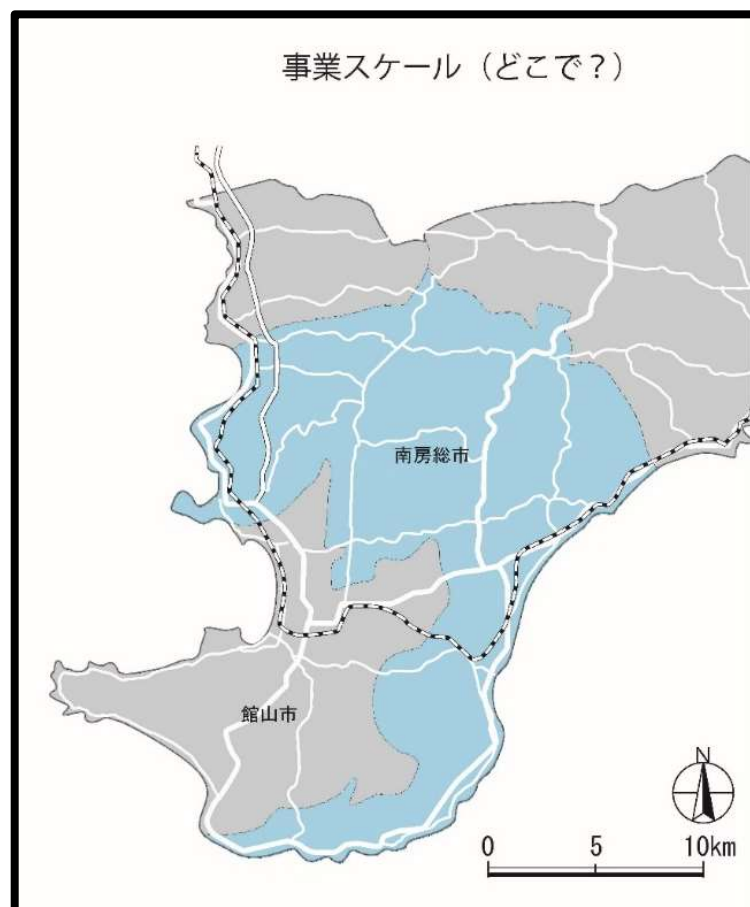
	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月
(1) 受付窓口事業	←→	←→	←→	←→
(2) 暮らし提案事業	←→			
(3) フォローアップ事業	●	●	●	●

【成果】

指標名	内容・目標値
空き家マッチング	10件
イベント開催	10回
リノベーション	3件
移住・定住者	10～20世帯

【事業スケール】

(※事業スケールは議論が必要)



発表の概要

- ・前回会議から事業の対象であるターゲットを絞って話し合いを行いました。そもそもの移住・定住の年齢層のターゲットは20代・30代の若者、そして子育て世代の方達をターゲットとしてイメージしています。市内で起業したり2拠点ワークが可能な人材をイメージしつつも、移住者のターゲットとしては、それだけに限らずに考えました。
- ・移住・定住を促進の事業としては、まずは「①受付窓口」を作ります。続いて「②南房総市での暮らし方」の提案。単に空き家の提供をするだけではなく、物件自体も魅力あるものにします。物件についてもリノベーションを施したものを用意して、ただ住むだけに借りる、買ってもらうだけではなく、シェアハウスや共同ワークショップなどを提案します。「③フォローアップ事業」として、補助金を交付したり、コミュニティのいろんな事業者とつなぎ合わせる必要があると考えました。
- ・この3つの事業をする際のステークホルダーとしては主に市役所で考えました。例えば、「①受付窓口」事業では市役所、物件の空き家の情報の管理、その後さらに市役所から一般の方に見られるような情報の発信をしてもらうその他には、ホームページを作成・管理する業者、不動産屋だと考えました。「②暮らしの提案」事業では市役所が主役で、その他に、観光協会とか不動産オーナー、物件をリノベーションするにあたってデザイナーとか工事業者が関わります。観光協会と連携をして、テーマごとのツアーで仕事や暮らしなども考えられます。「③フォローアップ事業」として、事業者とのマッチングが必要です。成果としては、①受付窓口事業ではマッチング10件、②暮らし提案事業ではイベント開催年10回、リノベーション3軒、③フォローアップ事業では、移住・定住者数では年10～20世帯と考えました。

第4回に向けたコンサルタント意見等

- ★本文中の赤字は第4回の議論や発表の際のポイントとして、ご確認をお願いします。
- ★（タイトル）＝事業名については仮案で記入しました。第2回WSの意見で出た「南房総移住・定住大作戦」と「トータルコーディネート」事業を組み合わせました。
- ★【私たちの想い】は、提案の前提となるメンバーの考えを整理したものです。【課題】は、第3回ワークショップでの議論と整理を踏まえ3点から再整理し、【私たちの想い】と繋がるよう補足しました。【事業の内容】は、第3回ワークショップでの議論と整理を踏まえ、（1）受付窓口事業、（2）暮らし提案事業（3）フォローアップ事業としています。
- ★【事業のステークホルダー】は、大枠だけ記載しています。具体的なステークホルダーの想定（例えば、不動産オーナーであれば、〇〇地区の不動産オーナーなど）がまだ決まっていないので、第4回までにメンバー各自で具体的なイメージを考えてみてください。
- ★【スケジュール】は話し合いの中では、1年スパンでは考えましたが事業の黎明期（開始時）からアウトカムが達成されるまでを想定して考えてみましょう。
- ★発表は全員で分担ということでしたが、各パート「私たちの想い」「解決したい課題と目的」「具体的な事業内容」「ステークホルダーとスケジュール」「成果（+まとめ）」などで分けて発表も考えられます。

この提案書（たたき台）は、第2回、第3回ワークショップでの話し合いをもとに作成したものです。この提案書と事業シート（模造紙）を使って第4回市民ワークショップで発表していただきます。

- ・ **赤字**は、メンバーのみなさんが特に強調された点等です。発表の際のポイントとして、ご活用ください。
- ・ **黄色ハイライト**は、第4回ワークショップまでに各班の皆さんに考えていただきたい所となります。
- ・ **グレーハイライト**は、模造紙大の事業シートには反映できていないことですが、提案の意図や内容などをより分かりやすくするため、皆さんのご意見からコンサルタントが補足したものです。
- ・ 各項目をご覧ください際の注意点は、本たたき台の最終ページ「第4回に向けたコンサルタント意見」に記載しましたので、あわせてご確認ください。

暮らし班

班員

芳賀、栗原、前川、八木、高木、渡辺

（敬称略、名簿順）

暮らし班の提案

(タイトル)

1. 私たちの想い

私たち暮らし班は、人口減少が止まらない中で、このまちはどう生き残っていくべきか、「地域のあり方」を中心に議論した。

【地域の絆の維持・顔の見える地域づくりが必要】

- ・今後ますます人口減少・少子高齢化が進む中で、地域の絆が薄れ、失われていくことへの危機感を抱いている。
- ・買い物や遊びは市外でするため、この地域を担っている、ここに住んで良かった、など南房総市に住んでいる実感を得る機会が少ない。
- ・昔から住んでいる人は、ここには魅力がないと感じていることも多い。
- ・このまちに昔から住んでいる人以外は、地域に参画できていない（移住者、女性など）。
- ・地域の役員や委員など様々な役割が特定の人に偏っている。
- ・草刈りや遊びなど「暮らしの技術」を継承していくことが必要。今の親世代が体験していないため、子どもたちに伝承できていない。

【縮小社会でも生活の質（Quality of Life）を維持することが大切】

- ・縮小社会を見据えた地域づくり（スマートシュリンク）、「偉大なる縮小」が大切。
- ・地域の中で生活に必要なものが揃い、交通の足を確保できるよう、小さな拠点と交通網などハード面の整備が必要。
- ・地域での孤立を防ぐための見守り、食事や買い物などソフトの支援も必要。
- ・市全体としての一体感や1つのゴールを目指すことも必要だが、一方で、7つのまちのまとまりを重視した地域づくりも必要。

【市民自身が地域をマネジメント（経営）することが大切】

- ・2019年の台風被害で、市役所は機能しなかった。災害が大規模化、頻発化する時代にあっては、地域の実態に合わせて自主防災機能を発揮することが重要。
- ・地域でできることは地域で担い、公助に求めることは明確に分ける。
- ・地域自治の担い手は「行政区」だが、担い手や後継者不足が問題で、活動継続が困難になっている。
- ・何事も楽しく参加できる仕組みづくりが必要。楽しいことには多くの人が参加するし、長続きする。

2. 具体的な内容

【解決したい課題】

①「行政区」の事業継続

- ・地域自治の担い手は行政区で、市内には116の行政区があるが、リーダー的役割を担う人材が不足している。
- ・区長の交代によって、行政区で実施している事業の継続性が失われることが危ぶまれる。
- ・災害時に、市役所は機能せず、行政区の自主防災機能が果たす役割が大きいため、行政区の強化が必要である。
- ・平時から「顔の見える地域づくり」をすることで、災害時の対応が可能となるが、普段からの地域の絆を築いておく必要がある。

②「地域づくり協議会」の役割の見直し

- ・地域づくり協議会は、合併後に、地域自治のために7つのまちごとに立ち上げられたが、本来の目的を果たしていない。
- ・各地域づくり協議会の果たしている役割がまちまちで、各地域団体が自由に活動している様子。また、和田地区は様々な経緯から地域づくり協議会が解散となった。
- ・現在、6つの地域づくり協議会には、それぞれ1～2人の「地域づくり支援員」が臨時職員として配置されているが、実態としてはお手伝い役にとどまっており、地域自治のために機能していない。
- ・地域づくり支援員自身に、地域自治を担っていこうという想いがある人は少ないように見える。
- ・このため、地域づくり協議会の本来の目的に立ち返り、地域自治の担い手としての役割を果たすように仕組み自体を見直す必要がある。

【目的】

人口減少に対応した安心・安全に暮らせるまち
「帰ってきてもいいよ」と言えるまちにする

人口減少する中でも、このまちの良さや守るべきところは守り、安心して安全に暮らし続ける。その結果として、地元の人や子どもたちに「帰ってきて」ではなく、「帰ってきてもいいよ、我々は困っていないけどね」という気持ちで迎えらるようなまちにすることを目指す。

【事業の内容】

①行政区に事務局機能を担う人材を配置する

- ・区長のサポート役として、各行政区に一人ずつ配置することが最も理想である。難しい場合は、例えば旧小学校区単位など、できるだけ細かい範囲で目配りする役割を持つ人を置く。最終的には、7つのまちごとなど、地域特性に応じて、話し合いにより配置単位を決める。
- ・人材の候補としては、40代以下の若手市職員、自覚ある市役所OBのほか、年金生活の高齢者、移住者などが考えられ、地域自治の担い手の役割を有償で、仕事として任せる。⇒【他のテーマとの協働（横串）】「しごと」「移住・定住」に関連。
- ・事務局機能の内容については、各行政区が話し合って決める。（※この部分は特に話し合っていないませんが、例えば、冠婚葬祭や会議等の連絡調整、祭りや美化などの活動の取り仕切り、各種書類作成などを列挙することが考えられます。）
- ・いくつかの行政区において事務局機能を設置するモデル事業を実施する。

②地域づくり協議会と連携し、地域自治の担い手を確保・育成する

- ・各地域づくり協議会に配置されている地域づくり支援員（1～2人程度）のうち、1人を行政区担当とする。
- ・116行政区の事務局機能を数名の地域づくり支援員だけで担うことは難しいと考えられるが、地域づくり支援員の役割自体を、行政区の事務局機能を果たすよう見直していく。
- ・なお、地域づくり協議会がない和田地区については、行政連絡協議会（行政区の区長会）が代理することが考えられる。
- ・例えば、地域づくり支援員だけでなく、地域づくり協議会のメンバーから、行政区の事務局機能を担う人材を選出することも考えられる。
- ・まずは、行政区を担当する地域づくり支援員が地域自治の担い手としての自覚を持てるよう、教育・研修を実施する。
- ・また、行政区と地域づくり協議会が合同で、それぞれの活動について発表し、学び合う機会をつくる。普段、地域への参画が少ない、若者や子育て世代、移住者が参加するきっかけとし、地域自治の担い手の裾野を広げる。

【事業のステークホルダー（協働実施者）】

・中心となる組織：

116の行政区、6つの地域づくり協議会、行政連絡協議会

・地域の人材・団体：

市民、区長、地域づくり支援員、各種地域団体（子ども育成会、青年会、婦人会、老人会、社協、民生委員など）

・地域団体に属さない移住者

（※事業シートに図案を記載していますので、あわせてご確認ください。）

【スケジュール】

①事務局機能の仕組みづくり

②モデル事業実施

③地域自治のための人材育成

④本格導入

（※事業シートに図案を記載していますので、あわせてご確認ください。）

【事業の成果（アウトカム）】

○地域自治が強化される

・行政区において住民が必要とする事業が継続されている。

・地域自治を担う人材が育っている。

・若者、子育て世帯、高齢者、女性、移住者など多様な人が地域自治に参画している。

【事業スケール】

・各行政区が各地域づくり協議会と連携しながら、地域自治を強化する。

（※具体的には、7つの地域センターの場所を示し、その周りを丸印などで囲み、地域の絆を表すことが考えられる。事業シートに図案を記載していますので、あわせてご確認ください。）

発表の概要

- ・暮らし班は、未来を楽しい気持ちで考えているだろう他の班と異なり、どうしても守りの姿勢となる。どうやらこの先 2040 年くらいまでどう頑張っても人口減少は進んでいくという中で、我々はどう生き残っていくのかが主題となった。
- ・議論の全体像がまとまっていないので、私の理解を話すと、課題として地域の担い手不足が表面化している。実際に自治の担い手である行政区でも、117 行政区から 116 行政区になり、行政区の合併が起きている。
- ・また、暮らしの実感として、自分たちがこの地域を回しているんだ、この地域に住んでいて良かったという実感を得る機会が失われてきている。それは元から住んでいる土着の人以外に移住者と女性の参画ができていないという課題もある。実際に草刈りや遊びの技術を、親世代が体験していないために、子どもたちに伝承できていない。地域としては暮らしの技術を守っていかなければならないところに来ている。
- ・こうした課題に対して、行政区だけではなくて、地域づくり協議会とか、地区社会福祉協議会、民生委員、青年会、老人会など色々な方々が関わっているが、どこも本当に苦しい中どうしていくか。
- ・ゴールとしては、人口減少の中でもうまく守るべきところは守って、安心安全に暮らしていこうということになっている。結果として、地元の人が子どもたちに「帰ってきて」ではなくて「帰ってきてもいいよ、我々は困っていないけどね」という気持ちで迎えられようにしている。
- ・話の中心としては、自治の担い手は、やっぱり行政区だということは一致している。普段の地域づくりとか暮らしの中での困りごとへの対応、あるいはこの間の台風のような災害が起きた時には、行政は役に立たないという意見があった。最終防衛ラインは行政区だ。目の届く範囲で守っていくという意味では行政区の役割は大きいので、現在頑張っている行政区も含めて、事務局機能を持たせていこうというのが前回までの話の流れである。
- ・どうやって事務局機能を持たせていくかというと、具体的な手段としては、地域づくり協議会の活用が挙げられた。合併以来、人口減少で弱ってくる各行政区の機能を補完する意図もあり、旧町村単位に地域づくり協議会が立ち上げられ、そこには市の臨時職員として地域づくり支援員が 1、2 人配置され、事務局やお手伝い役となっている。この人たちが行政区をお世話すると、支援員 1 人あたり数十の行政区すべての事務局機能を担うのは現実的に難しいかもしれない。一方、116 行政区すべてに市の職員を置くとすると、行政としては難しいかもしれない。
- ・けれども、暮らし班としては、行政区が大事だから、行政区に事務局機能を置くよう発信することとし、なるべく細かい範囲で目配りしてくれる市の職員もしくはその役割を持つ人を置くことを目指して議論を進めている。
- ・仕事班から話があったとおり、自治の事務局機能を担う人にお金を払うとしたら、市の職員として配置するのではなく、地域の人たちにお願ひし、謝礼を払って、ダブルワークの一手段とすることも考えられる。地域に残りたい若者だけでなく、年金生活の高齢者にとっての収入源となり、もっと暮らしが豊かになるし、地域で人を雇うことにもつながる。

第4回に向けたコンサルタント意見等

- ★本文中の赤字部分は、模造紙大の事業シートには反映できていないことですが、提案の意図や内容などをより分かりやすくするため、皆さんのご意見からコンサルタントが補足したものです。ワークショップでの意見交換の趣旨と相違ないかどうか、ご確認ください。
- ★冒頭の（タイトル）＝事業名が決まっていないので、メンバー各自で次回までに考えて、第4回ワークショップで決めましょう。
- ★本文中の小見出しや四角囲みした部分は、暮らし班の提案のポイントと思われる箇所です。発表の際のポイントとしてご活用ください。
- ★【私たちの想い】は、提案の前提となるメンバーの考えを整理したものです。第2回、第3回ワークショップの課題整理の際に、いったん欄外に寄せた付箋紙を中心に再構成しています。
- ★【課題】は、第3回ワークショップの議論を踏まえ、「行政区」と「地域づくり協議会」に関する課題の2本に整理しました。
- ★【目的】は、第3回ワークショップの発表内容をもとに、説明を追加しました。
- ★【事業の内容】は、【課題】と対応するよう、2本に整理しました。
- ★【事業のステークホルダー（協働実施者）】は、項目ごとに分類するなど整理しました。
- ★【スケジュール】については話し合いができていませんが、本提案書（たたき台）に案を記載しましたので、メンバー各自で次回までに考えましょう。なお、南房総市後期基本計画の計画期間は令和5～9年度です。
- ★【事業の成果（アウトカム）】についても、同様に案を記載しましたので、メンバー各自で次回までに考えましょう。
- ★【事業スケール】についても、同様に案を記載しましたので、メンバー各自で次回までに考えましょう。
- ★発表については、第4回的前半にてしっかりと確認しましょう。なお、他の3つの班は、全員で発表することになっているようです。私たち暮らし班は、栗原さんに発表をお引き受けいただきましたが、もしみなさんからご希望があれば、例えば、発表後にお一人お一人ずつ補足するなど、発表の持ち時間の使い方については変更も可能と考えています。

(4)第4回市民ワークショップ意見概要

第4回市民ワークショップの意見概要は「第2章 各班意見」の内容となります。